[小説] 峰崎龍之介
[イラスト] 馬克杯
3
ダンジョン暮らしの元勇者
A former brave resident in the dungeon.
試し読み版

contents

A former brave resident in the dungeon.

story by minesaki ryunosuke and illustration by mogcup

一　章　強襲作戦、始動　006

二　章　闇の中の脱出劇　028

三　章　追手の影　039

四　章　ニーナ・デトルムの返礼　059

五　章　『勇者』という名の呪い　082

六　章　血染めのブラム　094

七　章　その、呼び声　112

八　章　勇者対聖騎士　121

九　章　死闘、決着　145

十　章　聖騎士の屈辱　166

十一章　帝国騎士たちの末路　180

十二章　彼らの帰還　204

十三章　聖騎士は折れず　213

十四章　早すぎる再戦　224

十五章　ならばこの身は魔王となりて　247

十六章　ヘクトル・レイス・ザヴァク　255

十七章　待っていた女たち　268

十八章　母子丼、再び　303

十九章　広間のふたり、馬鹿の極み　343

番外編　『おほほ』と『むむむ』の二重奏　352

一章　強襲作戦、始動

「勘違いされては困るのですが――私は怒っているわけではないのです」

蛇顔の男がどこからどう見ても激怒しながら言ってくるのを、ベアトリスは聞いた。

（話、長くなりそうねー）

テーブルを挟んだ向かいのソファでは、この屋敷の主であるケネスがこめかみをひくつかせている。馬をしばらく失敬していたことが、余程腹に据えかねているらしい。

それでも、声の抑揚だけはきちんと制御していた。このあたりは流石に、この温泉以外なにもないレムトールを売り出し、大陸随一の観光地に押し上げた商人のテクニックだった。

「よいですか、繰り返しますが私は怒っているのではありません。ただ悲しいのです。せっかく縁に恵まれ、あなたをお迎えできた。だというのに、殿下ときたら無茶ばかりを――」

くどくどと、ケネスは続けた。この薄っぺらい忠告は、彼がこの屋敷に汗だくで走りこんできてから、ずっと繰り返されている。お陰でいい加減飽きてきていた。

（本題に入るのが遅いのも、商人気質が強いせいかしらね）

思いながら、ベアトリスは静かにテーブルへと手を伸ばした。並べて置いてある紅茶と茶菓子の間で手を一往復させてから、茶菓子の方を手に取る。

甘い。甘くて美味しい。臓腑に染み渡るようだった。街の外にいる間には甘味に縁がなかったせいかもしれない。

しばらく堪能した。視界の端に、ちょっと羨ましそうなマリーが映っていた。ハーレン兄妹とキルスは同じ部屋にはいるが、流石に皇妃と領主との話し合いに口出しするほど、空気が読めないわけでもない。

「わかるでしょう。これは当たり前の話です。誰であろうと、人のものを無断で奪えばそれは盗人となる。たとえ偉大なる皇帝陛下の奥方であろうと、それは変わらない――」

「そうね」

いい加減鬱陶しくなり、短く返事をした。

「まったくもってその通りだわ。ええ、一時的にとはいえあなたの大事なお友達を拝借したのは、確かに盗人の所業

ね」
「わかっていただけましたか」
と、ケネスは元より爬虫類めいた顔つきをさらにいやらしく歪め、またなにかを言おうとした。
だがベアトリスは彼がなにか言う前に、さっと足を組んだ。はしたなくスカートが捲れ、ケネスの注意を引く。その間に、言葉をねじ込んだ。
「でもケネス。——例えば、本来帝都に納めるべきだった税金をちょろまかすのも、立派に盗人よね？　そこんとこはどう思う？」
「……なんのことですかな」
歪みかけた表情が、冷徹に引き締められる。まずい話題に踏み込まれたことへの警戒がにじんでいた。やはりこういうことにはよく頭が回る手合いだ。
しかしこちらも、狭い肩身のまま十数年も皇妃をやっているのは伊達ではない。
「とぼけても駄目よ。あれだけの良馬を百体以上、個人で所有しているのはどう考えてもおかしいわ。実際に車を引かせてみて、あれがどれくらい値の張る代物かよくわかったもの。維持費だって馬鹿にならないし……一介の領主が普通に稼ぐだけじゃあ、到底お金が足りないわ」
ケネスの顔を見た。変化はなかった。感情を表に出してしまうのを怖れたか、無表情に近い。だが反応を抑えようとしている時点で、ベアトリスの指摘にそう間違いがないのはわかった。
「……ま、大方ヘクトルには話を通しているのでしょうけど。そして私はヘクトル——あなたの飼い主には疎まれてるわ。不正を指摘したところで半笑いでも返ってくるだけでしょう。——でも、いまの帝国を牛耳っているのはあくまで皇帝よ。そして私は、そこに対してはまだ影響力があるし……やろうと思えば、今回のように街を出るなんて無茶もする。……言ってる意味、わかる？」
なにもかもすっ飛ばして、一番上の権力者に密告してやろうか。これはそういう脅しだった。
実際には縁の始まりからして、皇帝とは冬の空より冷え切っているのだが——それは余人にはわからないことだろう。
「……」
ケネスは黙ったままだった。だがほんのわずかに、額に汗をかいている。蛙だと思って睨んだ相手が巨大な肉食獣

だと、ようやく気づいたのか。
そうなってから、ベアトリスはふっと顔から力を抜いた。小さく微笑んでやる。すると……
「……くっ。母子揃って口の減らない……！　もう付き合いきれません。し、失礼しますよ！」
ケネスはわなわなと震えながら立ち上がり、逃げるように部屋の出口に向かった。
「こ、今夜はこちらに泊まります。なにかすればすぐにわかりますよ。……くれぐれも大人しくされていますよう！」
それだけ言い残して、蛇顔の男は退室した。どたどたという、怒りを隠しきれない足音だけが聞こえてくる。
「……やれやれ。蛇っぽいわりには体温高そうなことで」
ベアトリスは肩をすくめると、部屋の窓に顔を向けた。外はもう陽が落ちかけている。じきに夜が来るだろう。そしてそうなったら。
「いよいよ、ね。腕が鳴るわ」
また暴れられそうだ――危険な思考を躊躇なく思い浮かべながら、彼女はにやりと笑った。

◇

――観光地の長というのは、思ったよりも儲かるらしい。
小高い丘のひっそりとした林に身を潜めつつ屋敷を見上げた時、ブラムはそんな下世話な感想を思い浮かべた。
といっても、彼にそう思わせたのは屋敷そのものではなく、それを囲っている壁だが。
屋敷を囲うようにそびえ立っている外壁は、門番に気づかれないよう少し距離を取っているにもかかわらず、威圧感を与えてくるほど大きかった。恐らく侵入者を阻むためのものなのだろうが、それにしても過剰な大きさだ。
（この暗さでもわかるってんだから、相当だよな）
既に夜は深まっていた。時計はないが、夜気の冷たさでなんとなく察せる。しかも夕刻頃から雲が増え始めたので、あたりはひどく暗かった。
「それで……どうするのですか？」
――と、同じように林に身を潜めているニーナが言ってきた。それにちらりと視線を動かすと、彼女はちょうど片眼鏡を鬱陶しげに弄っているところだった。
（伊達なんだよな、あれ。魔導師っぽく見せるための。……邪魔なら素直にポケットにでも仕舞えばいいのによ）
内心でだけ呟く。口に出せば言い争いになるのは目に見えていた。ミオンという目的のために様々な事情を飲み込

むことにしたらしいニーナだが、基本的にブラムとは相性がよくないのだ。
「どうする――ってもな。見ての通り屋敷の周囲はがちがちに固めてある。やましいことがありますって白状するみたいにな。俺はよじ登れんこともないだろうが……お前は無理だろ」
「魔法を使えばなんとでも……いえ。あとが続かない、ですね……」
ニーナはなにか反論しようとして、結局やめた。飛行や大跳躍を可能にする魔法は存在するが、どちらもはっきりと大魔法の上、かなり独特な術式を用いる。本来は医療魔法が専門のニーナには荷が重いだろう。仮に可能だったとしても、屋敷の敷地内に入っただけで困憊（こんぱい）していては話にならない。
（つーか、なんでもかんでも使えるアルが異常なんだよな。あいつが一番身近な魔導師だったから、そういうもんだと思ってたが）
呟きつつ、小柄な魔導師少女を見やった。心なしか残念そうにしている。足を引っ張っているとでも思ったか。
（真面目なのは美点だが、たまに欠点にもなるな）
肩をすくめた。静かに告げる。
「ま、できたとしてもやらんだろうから気にするな。……とりあえず、あっちを見な」
言いながら指差した。向かって斜め右方向に、頑丈そうな鉄格子で閉じられた屋敷の正門がある。その前に突っ立っている三人ほどの門番の姿も、頼りない月明かりに照らされてかすかに見えていた。
「あれをぶちのめして、強引に突破する。正門も派手にぶっ壊そう。怪盗よろしく優雅に潜入ってのは楽しそうだが、今回はそれじゃ意味がないからな」
「……？　なぜです？　気づかれずに済む方法があるなら、それに越したことはないですよ」
ニーナは言いながらまた片眼鏡（モノクル）を弄り、やがてこっそりと嘆息していた。それからやはりこっそりと、片眼鏡（モノクル）を胸ポケットに仕舞う。どう足掻いても邪魔になると悟ったらしい。
「ま、そうだな。目的のブツを奪うだけならそれがベストだろう。だがいまはちょいと事情が違う。さっきも馬車の中で言ってたが、逃げるには足が必要なのさ。そしてそれは、別のところにいるベアトリスたちの担当だ。でもって、

足がこっちに届くのは早すぎても遅すぎても具合が悪い。つまり、タイミングが重要なんだよ」
「……なるほど」
彼女はそこで、こちらの言いたいことを察したようだった。先を引き取ってくる。
「そのタイミングを計るために、こっちで花火をあげると。そういうことです？」
「正解だ。派手に暴れて狼煙を上げ、別働隊が動き出すきっかけをくれてやる。だからこそ強行突破である必要があるのさ。……他に質問は？」
ニーナはふるふると首を横に振った。それに微笑みかけ、立ち上がる。
「いい子だ。さて、狩りの時間だぜニーナ。気合は十分か？」
「……うるさいです。言われなくてもやってやるですよ」
彼女は即座にそう言ったが、声は震えていた。無理もない。これから挑むのはザヴァクの貴族、その本拠だ。彼女にとっては身内の軍でもある。しかも彼女は、そもそも軍人でも戦士でもない。葛藤はあって当然だった。
だが――
「いまお傍に参ります。ミオン様」
続く言葉には力があった。覚悟があった。不安と恐怖をねじ伏せようとする意志があった。
だからブラムは慰めることも鼓舞することもなく、にやりと笑ってこう告げた。
「……まずは手本を見せる。ついてきな」
返事はなかった。期待もしていなかった。ブラムはもう、スイッチが入っていた。
歩き出した。正門に向けて。そうしながら、すべきことの準備を着々と進める。
「――なんだ？　おい、貴様ら！　そこでなにを――」
門番のひとりがこちらに気づいた。続いて他のふたりもこちらを向いたようだ。
「――なに、ちょいと『囚われのお姫様』を奪いに来ただけさ」
ブラムは呟き、聖剣を抜いた。緩く握り、意志を伝える。
「久々に全開でいくぞ――」
呟きに応じ、刀身が燐光を纏った。それは見る間に高まり、ブラムが伝えた破壊の意志を体現しようとする。
「――光よ、穿て！」
直後。正門の鉄格子が、轟音ののちに跡形もなく消し飛

んだ。聖剣が放った光の棘――全力の爆砕棘光の威力の前では、鋼鉄製の門も形無しだ。

次に門番が全員、悲鳴をあげる間もなく宙に浮いた。爆発の余波だけでもその威力があった。まるで木の葉のように打ち上がっていく。

それだけでは終わらなかった。ブラムは宣言通り、全開でことに及んでいた。

「穿て、穿て、穿て、穿て、穿て――」

光の棘がばら撒かれた。もはや道を阻むものなどないが――合図は派手な方がよく、景気づけにもなる。

土煙がもうもうと立ち昇り、光が暴れ狂った。熱風が夜気を払ってなお吹き荒れ、衝撃が轟音を生んで破滅的なリズムを奏でる。

――やがてどさりと音が鳴った。吹き飛ばされていた門番が地面に墜落したのだ。

「う、ごおおお……」

呻き声があがった。死んではいないが、もはやできるのは呻いていることだけだろう。というか、生きているだけ儲けものの地獄絵図だった。

「……え、えぐい……」

ニーナが背後で呟いたが、それは無視しておいた。

「――これで中の連中も気づいたろう。慌ててやがるのが目に見えるぜ」

耳を澄ませば、屋敷の中からどたどたという足音や、なにが起きているかと叫び合うのが聞こえてくる。『花火』の音を聞きつけて、屋敷の警備隊員が集まり始めているのだろう。

「いくぜ、ニーナ。もたもたしてっと待ち合わせに遅れちまう」

ブラムは言いながら、綺麗さっぱり吹き飛んだ門を悠々と潜り、そのまま屋敷に向けて歩き出した――

◇

「光よ、奔れ！」

ちかちかと光が明滅した。その光は衝撃を伴って空を駆け、やがて目的の場所――敵のどてっ腹に直撃する。

「ぎゃあああ⁉」

「なんなんだよこいつはっ⁉」

聖剣が放った光の矢に吹き飛ばされ、屋敷の警備兵たちが悲痛な声をあげる。それを見ながら、ニーナは改めてこう思った。

――やはり勇者（こいつ）は化け物だ、と。
屋敷の中に踏み込んで数分。いまなお続く騒ぎ――勇者（ブラム）の強引な行進を聞きつけて現れた者たちは、視界に入る端から吹き飛ばされ、その一撃でもって沈黙を強制されていた。
（というか……こっちの気合が十分かどうかなんて、関係ないじゃないですか……）
半ば呆れるような心地で呟く。
一応ニーナも、敵影を確認する度に攻撃的な魔法の術式を用意していた。空破拳（エーテルブイスト）という、短距離に衝撃波を撒き散らす魔法である。
ミオンが囚われているのが屋内であることは予想していた。なので予め練習し、錬度を高めてあったのだ。攻撃魔法で最も一般的なのは紅焔（イグニス）だが、延焼の可能性がある場所では使いづらい。
（どっちにしろ、この調子では出番はなさそうですが……あ、また吹っ飛んだです）
「ひいいいいいい!?」
「ぎゃあああああ!?」
「死ぬうううううう!?」
先を行く黒い背中の向こうでまた悲鳴があがり、人影が宙を舞った。それなりに広い廊下の端まですっ飛んでいく様は、どこかコミカルですらあった。
「不運を呪え。神を恨め。運命を憎んで這い悶えろ。経緯はどうあれ勇者（オレ）を敵に回した以上、ここは地獄に成り果てる。さあ――死にてえ奴から前に出ろ。そうでないならクソして寝な！」
ブラムはそんなことを嬉々として叫び、輝く聖剣を振るって破壊の光を撒き散らし、ずかずかと屋敷の奥へ奥へと進んでいった。これではどちらが悪者だかわかったものではない。
（――あれ？）
――と、ニーナはふと首を傾げた。
「ちょっと待つです。さっきから迷いなく進んでますが、道は合っているのですか？」
「あん？」
ブラムがふと立ち止まり、首だけで振り返ってきた。彼はしばし沈黙してから、言ってくる。
「……。そーいや皇女ってどこにいるんだろーな。ノリで進んじまったが」

「アホですか！」
やっぱりなにも考えてなかったか――思いながら叫んだ。すると黒き勇者はがりがりと頭を掻き、言い訳するように呟く。
「しょうがねえだろ。ベアトリスですら皇女の正確な居場所は知らなかったんだ。それに……道がわからねえなら訊けばいいだろ。そこらの『親切な通りすがり』によ」
彼が言った、ちょうどその時。
だだだだっ、と足音が聞こえた。階段を下りるような音。そしてニーナの視界にもちょうど、階段と思しきものが映っていて――計ったようなタイミングで、数人の人影が現れた。
「賊め！　覚悟しろ！」
「ええい、ケネス様がおられぬ時に限ってこのような……！」
彼らは口々に言うと、それぞれ武器を構えた。屋内用の装備なのか短剣や警棒ばかりだ。
実際、その取り回しの利く武器は便利そうに見えた。ブラムが握っている聖剣は一般的な長剣（ロングソード）ほどの長さがあるので、超接近戦となると動きにくいだろう。
そして新たに現れた警備隊との距離は、これまでよりも格段に近いものだ。やりにくい距離での戦いになるのは必至といえた。
「ここであれだけいると、ちと窮屈だな」
案の定ブラムはそんなことを呟いた。そして、なにを思ったか聖剣を鞘に収める。それから、まったく間を置かずにまた呟いた。
「突っ込む。手があるなら援護してくれ」
言うが早いか、ブラムの姿が霞んだ。正確には、そう錯覚するほどの身のこなしで走り出したということだが。
（って、そんな打ち合わせもなしにいきなり――!?）
完全に置き去りにされてしまって、ニーナは慌てた。
「おら来いよ。相手はたかがひとりだぜ？」
警備兵たちのただ中に、無手となったブラムが躍り出た。挑発する余裕すら見せている。
当然、敵はそれを見逃さない。ブラムに罵声を浴びせながら、次々に襲い掛かった。だが彼は一切慌てた様子を見せず、それらを容易く避け、受け流し、拳句カウンターの拳を打ち込んでひとりを無力化した。しかもそれで動きを止めるでもなく、次から次へと標的を変えて襲い掛かって

いる。動きの素早さと暗さとが重なり、さながら死神が人の魂を刈り取る現場のようだった。
（ああもう、化け物基準で『援護しろ』とか気安く言うなですー！）
あれだけ動かれると、敵と味方（ブラム）との区別がつかない。ニーナの腕では敵だけを狙撃することはできないだろう。だがそれでも、なにもしないというのはない選択肢だった。自分は『おまけ』としてついてきたわけではない――そう念じながら、彼女は走り出した。
「や、やー！　とー！」
不慣れな雄叫びなどもあげてみる。するとブラムの猛攻にかかりきりだった警備兵たちのうちふたりほどが、こちらに気づいたようだった。
「もうひとりいたのか！　ちょうどいい、こっちのバケモンよりはマシだろ！」
「ちぃっ、ちっこくて見えなかったぜ！」
連中は失礼なことを口走りながら、武器を構えてこちらに走ってきた。
（こいつらに遠慮はいらないですね！　ぶっ飛ばすですよ！）
ニーナはイラっとしつつも、接敵に備えて『それ』を口ずさみ始めた。
「怒りの空より来（きた）るものよ。汝が拳、振るうはいま。汝が憤怒、解き放つはいま！」
詠唱。世界を『説得』する呪文の枕詞。それに、走り寄ってきていた男たちの顔が引きつる。
「こいつ、魔導師か！」
男たちが叫ぶ。危機を予感して足を止める。だがもう遅い。詠唱は終わった。あとは望む魔法（ねがい）を告げるのみ！
「――空破拳（エーテルフィスト）！」
呪文が世界に突き刺さる。瞬く間に、魔法（ねがい）が魔力によって現出した。
生み出された衝撃波は、見えざる巨人が放った拳打の如く、男たちを正面から殴り飛ばす。
「こっちも外れかよおおおおお⁉」
彼らは床と水平方向に、滑るように吹っ飛んでいった。ちょうど、たったいま他の連中を全て叩き伏せたと思しきブラムの横を通り抜け、廊下の端までだ。
「――やるじゃねえか、ニーナ」
「お前が言うなです。トリプルスコアを越えているじゃな

いですか」
　ブラムの足元で呻き声をあげ、あるいは嘔吐しながら悶えている人を数えながら答える。八人。強いて言うならフォーススコアと言ったところか。よくもまあこの短時間で仕留めきったものだ。
「――いい具合に『親切な通りすがり』が集まったな。こんだけいりゃ、誰かひとりくらいは皇女の居場所を知ってるだろ」
　ブラムはにやりと口元を歪めた。相変わらず元勇者とは思えない、邪悪な笑みである。
「さて諸君。お疲れのところ悪いが、これから道を訊ねさせてもらう。ああ安心しろ。答えなかったからって殺しはしねえ。ただちょいと、肝臓の上につま先がめり込むだけだ。しばらくは腹痛と血尿とが押しかけてきて勝手にマブダチになりやがるが――ま、大したことじゃねえよな？」
　マフィアかギャングか、というその言い回しに、しばらく無音の時が訪れた。
　だがややあって――
「それ……半殺し、だろ……」
（……ですね）
　――その振り絞ったと思しき呻き声に、ニーナは深く頷いたのだった。

◇

　三階まで階段を駆け上ると、またぞろ警備兵と出くわした。
「邪魔だ、いるな、退け！」
　言いながら前を走るブラムが床を蹴り、相手がなにかする前に顔を蹴り飛ばす。その兵は恐らくなにが起きたかもわからないまま、鼻血を噴出して仰向けに倒れた。
「調子が出てきやがった。やっぱり勇者（オレ）は守るより、突撃のが向いてる！」
　活き活きした様子で叫ぶと、ブラムは二段飛ばしで階段を駆け上っていった。
「ちょ、ちょっと待つです！　歩幅を考えるとかないですかお前はー！」
「ん？　ああ、悪い。ちと落ち着くべきか……」
　ブラムは呟きながら足を止め、こちらが追いつくのを待つ態勢になった。それを見上げながら、ニーナは短いストロークでちょこまかと走る。
　――皇女（ミオン）は屋敷の四階、つまりいまブラムが立っている

階層にいると、一階でぶちのめした警備兵は言っていた。脅し文句で搾り取ったので怪しいところもあるが、いまはこれが最有力の情報だった。
（もうすぐです、ミオン様。いまお傍に参ります――って、え？）
――そんな風に考え事をしながら走っていたのが悪かったのか。ニーナは階段の最後の一段に躓躓いて、盛大にすっ転んだ。
「わああああああ……あ？」
固い床との熱い抱擁を予感して叫んだのが、途中で止まった。予感に反し、ニーナの体は床に激突する前に、ブラムに抱き留められていた。
「おいおい。怪我なんざしてくれるなよ」
「わ、わかってるですよ……って、どこ触ってるですかヘンタイ！」
受け止めてくれたのはありがたいが、彼の手は思いっきりニーナの左乳房を覆っていた。男に触れられるのは家族を除けば初めての部位だ。一気に顔が熱くなる。
だが、彼はさして気にした様子もなかった。
「安心しろ。俺がお前相手にヘンタイになるには、もうちょい成長が必要だ」
まるっきり子供扱いで床に降ろされる。失礼な話だった。これでも去年よりは胸が膨らんできたというのに――と、反論しかけて慌ててやめる。
（こいつにそれを教えてどうするというのです。アホらしい）
思いながら、そういえば受け止めてもらった礼を言っていないなと気づく。だがいまのやり取りのあとに頭を下げるのはどうにも癪（しゃく）で、彼女はふんすと鼻息を吹いて気まずさを誤魔化した。
それをどう受け取ったのかはわからないが――彼は小さく苦笑した。
「さて。連中の話じゃ一番奥の部屋だってことだったな。……つってもどこが奥だかわからんが。しゃあねえ、聖剣使うか」
言いながら、彼は聖剣を抜きかけた。だが途中で思い留まったように手を止める。
「そういや……ニーナ。鬼火（ライティング）は？」
「あ、使えるです。……とゆーか、最初から使うべきでしたね……」

そうすれば転ぶことも胸を揉まれることもなかったのに——と、やや脚色された愚痴が脳裏を過った。だがそれはひとまず脇に置いて、彼女は呟いた。

「鬼火（ライティング）」

光の珠が、掲げた掌の上に顕現する。魔法の無機質な光が暗い廊下を一気に照らした。

「行くですよ」

「ああ」

合図すると、ブラムは小さく頷いて歩き出した。行く先を照らすように魔法を制御しながら、その背中を追った。

「一階とは様子が違うですね」

ふと呟く。一階は複雑に道が分かれていたのに対し、この階は円を描くように廊下が続いていた。

「そりゃそうだろ。水周りは一階に集中せざるを得ないし、警備兵の詰め所もあるだろうしな。ここはまあ……客室と物置ってところなんだろうよ」

そんなことを言っている間に、目的の場所に着いた。階段の真裏にあたる部屋だ。円形に続いている廊下の構造上、ミオンがいるらしい一番奥の部屋というのは、階段の反対側——つまりここということになる。

（ここにミオン様が——）

焦がれていた瞬間を目の前にして、ニーナはぐっと拳を握った。

「……妙だな」

部屋の扉の前で立ち止まったブラムが、なにやら呟いた。腕組みし、訝（いぶか）しげに目を細めて扉を睨んでいる。

「なにがです？　ここまで来て止まるなです」

「……皇女なんてな、最重要の警護対象のはずだ。それがこんだけの騒ぎの中、ひとりも部屋の前で張ってないってことはねえだろ。連中に担がれたか？　いや、違うな。練度からしてそこまで根性のある連中とも思えん……」

ぶつぶつと呟くブラム。それに、ニーナは焦れた。ぐいと前に出る。

「ああ、もう！　そんなの開けてみればわかるです！」

「いやだから、その開け方が問題なんだ——っておい、軽率に開けるな馬鹿——！」

無視した。仮にこの部屋にミオンがいないなら、それはそれでさっさと確認して次の可能性に当たらねばならない。これは時間が勝負の分かれ目となる仕事だ。ぐずぐずしている暇はない。

思いながら扉を押し開けた。
そうして見えたのは――ミオンのものでは決してない、屈強な男が手を掲げている様だった。
「……え？」
思わず漏らした声。それを掻き消すように、力ある一声が紡がれた。
「風刃（エギュベント）」
――それは起動呪だった。無色透明の、薄く鋭い衝撃波を飛ばす……攻撃魔法のだ。
（死、ぬ――）
反射的に思い浮かべた。それだけでも奇跡的なことだった。風刃（エギュベント）は威力を捨てて速さを求めた術式だ。見て避けられるようなものではない。
死ぬ。間違いなく死ぬ。誰とも知れぬ者に魔法で殺される。連鎖的に思い浮かべた――その瞬間だった。
「馬鹿、ぼけっとすんな！」
声が聞こえ、黒い背中が視界を覆った。
同時に、かすかな風が頬を撫でてくる。ぽたぽたというなにかが滴る音もした。
「……あ、え？　あ……」
――滴っていたのは血だった。無論ニーナのものではない。
ニーナを庇った、ブラムの血だ。
それが意味するところは、ひとつしかなかった。
「あ、あ、あ……」
しくじった――助かった命で思う。自分の軽率さが招いた悲劇を。
いまにブラムは倒れるだろう。斬り裂かれた腹を押さえて血反吐を吐くだろう。そして――死ぬだろう。
魔導師としての確かな知識が、悪い予測を確信めいたものにしていた。
（わ、私のせいで――）
最悪だった。最低だった。気の早いことに泣きそうにすらなった。
……だが。
「――大丈夫だ。ちといてえが死にゃしねえよ」
「……へ？」
極めて平然とした声で言ってくるブラムに、ニーナは半泣きの顔で間抜けな呻きを漏らした。
◇

「ほ、本当に大丈夫なのです……？」
「ああ」
ニーナが背中にすがり付いて確認してくるのに、ブラムは振り返らないまま頷いた。受けるのに使った左腕は血塗れだが、見た目ほど傷が深いわけではない。もっとも別に痛くないわけでもないのだが、それを口にしたらニーナは泣くのではないかという気がしていた。
「……こちとら、これよりひでえのを何千回も食らってんだ。こんなもんでいちいち死んでられっかよ」
彼女にはわからないであろうことを付け加えながら肩をすくめる。半殺しと治療を繰り返して抗魔力を鍛えていたなどと、悠長に説明している暇はなかった。
なにせ目の前には、はっきりとした敵がいるのだから。
「さてと——随分な挨拶だったな。そりゃま、ノックもなしに訪ねたのは無礼かもしれんが……生憎（あいにく）、礼儀云々より先に殺しの技を覚えさせられた無作法者でな。そこは勘弁してくれよ」
軽口を叩くが、その男——魔法で攻撃してきた兵は無言で立っているだけで、なにも答えてこなかった。
「だんまりか。……にしても、相手も見ずに殺しにかかるってな、あんまりにも物騒じゃねえか？」
言って、眼前の男に目を凝らす。だが顔は見えない。ニーナが集中を切らして鬼火（ライティング）が消えたため、部屋はほぼ真っ暗だ。
「このタイミング」
——と、男が口を利いた。無骨な喋り方だった。岩が口を利いたような印象を受ける。
「……賊以外にありえない。そして……一階の警備を抜いてここまで来るような相手でもある。オレの力量で殿下をお守りするには、不意を突くしかない」
「ほう。そりゃ冷静なこった。んで、その殿下はいまどちらに？」
「言うと思うか？」
男が剣を抜いた。静かに構える。飛び抜けた威圧感はないが——地に足のついた、確かな研鑽のあとが見て取れた。
「魔法はもういいのか？」
「独学のまがいものだ。どうせ死ぬなら剣がいい」
「……ほう」
ブラムはすっと目を細めた。左腕を庇うのをやめ、聖剣を抜く。

「一応訊くが……なぜ死ぬと思う？　お前の奇襲は上手くいった。結果的にだがな。お陰で俺の左腕はしばらくお荷物だ。勝ち目があるとは思わないのか？」
「お前と戦えば死ぬ」
男は言葉を切った。それこそ、死の直前の会話ゆえに噛み締めているかのように。
「腕の負傷など関係ない。お前が望めば誰であろうと死ぬ。お前からはそういう匂いがする」
断言だった。初対面で名乗りもしていないのに、だ。
「……わかっているなら退くって選択肢もあるぜ」
「任務だ。可能不可能にかかわらず、オレは殿下をお守りする」
「……そうか」
なるほど――これは厄介だ。ブラムは苦笑混じりに呟いた。
忠義の騎士。命を最初から捨てている。こういう手合いは実力差があろうがなかろうが、関係なく手強い。
――殺すしかない。この男の気持ちいいほどの割り切りは嫌いではないが、残念ながら生かしておくことはできそうにない。
この男はきっと、腕がもげようが足が千切れようが追ってくるだろう。心臓が動く限り任務に忠実であるのだろう。
――そういう女を、ひとり知っていた。だからわかった。この男からは彼女と――聖騎士ヴィオーラと同じ匂いがする。
「ブラムだ」
「なに？」
唐突な名乗りに、男が訝しい声を出す。ブラムはそれに笑いかけ、促した。
「名乗れよ。ガラじゃねえが、決闘ってなそういうもんだろ」
「……シャルティ」
返ってきたのはやはり無骨な声だった。だがほんの少しだけ誇らしいという色も混じっている。
彼はそのまま続けた。
「そうか。オレを殺すのはかの勇者か。勝てる気がしないわけだ」
彼――シャルティはそう言って、かすかに笑ったようだった。顔は見えないので、気配で察しただけだが。
だがそれも一瞬だった。彼はすぐに無骨な気配を取り戻

すと、剣を握り直した。
「ニーナ、下がれ」
「……っ」
告げるというより命じた。彼女は息を呑んで数歩下がったが、部屋からは出なかった。見届けるということか。
なんにしろ――
シャルティが身を沈めた。打ちかかる直前の挙動。それに合わせ、ブラムも気組みを整えた。
無色透明の殺意が、静かに体を満たした。温度のない……純粋な殺意が。
（思えば久々だな。流れじゃなく……明確に意識して人を殺すのは……）
意識は既に、シャルティを殺していた。
無数のパターンを、あらゆる可能性を数秒で吟味し終えていた。膨大な戦闘経験がもたらす予知にも似た感覚があった。
シャルティの腕では――万が一にも間違いは起こらない。
もう、わかっていた。
そのまま数秒待った。死を約束する瞬間を。
そして――
「――参る」
「――来な」
――その時が来た。
シャルティが床を蹴った。真っ直ぐに飛び出してくる。剣閃が一筋走った。声と同じく無骨な剣筋。
狙いは首。一撃必殺、死なばもろとも――そういう気概の突撃だった。
応じた。体が自動的に、予測していたパターンに沿って勝手に動いていた。
聖剣を振るった。全力の一振りを見舞う。吸い込まれるように、シャルティの剣を正面から捉えた。
「……っ⁉」
シャルティ。目を見開いている。その一撃で剣が折れたからだった。
「……見事」
無骨な呟き。末期の言葉。その瞳には、全霊の攻撃を無傷で凌がれたことへの驚きと、それだけの力量を持った相手に屠られる喜びが過っている。
「あばよ」
告げて剣を振るった。一撃で首を刎ねるつもりだった。

そして聖剣が、シャルティの首に迫った――その刹那。
「――そこまでッ！」
――聞こえたその制止の声があまりにも鮮烈で、ブラムは思わず剣を止めた。
ありえないことだった。本気で誰かを殺すと決めたブラムが、たかが声で止まるなどというのは。
だが現実に、剣は止まった。シャルティの首を薄皮一枚を斬り、かすかな出血を強いるだけでぴたりと静止している。
「――まったく、どいつもこいつも」
異様に通る声だった。聞けば振り向かざるを得ない引力を持ち、部屋に満ちた冷徹な殺意を一撃で霧散させる力を持っていた。
自然、視線が声の方に集まった。殺し合っていた男たちも、それを見守っていた少女も同じ方向を見ていた。
集まった視線の先には、暗い中でもはっきりと認識できるほど鮮やかな女がいた。
そして――
「ミ――ミオン様⁉」
「殿下……」
自分以外の者が同時にその名を呼んだことで、ブラムは彼女こそが第三皇女――ミオン・レクト・ザヴァクであると知った。

◇

（――お、始まったわね）
遠くから爆音が聞こえてきた時、ベアトリスはちょうど着替えを終えたところだった。
当然だが、ドレスではなかった。あれでまともに動いて戦えるのはマリーくらいだ。足の動きを隠せるという利点があるとはいえ、やはり戦う格好としては不適切だ。
また、ベスを名乗っていた時のような鎧姿でもなかった。いま纏っているのは、体をぴったりと覆う黒い革製の服だ。
保温性はそれほどでもないが、耐久性と動きやすさは折り紙つきの一品だった。元はザヴァクの特殊戦闘部隊が用いていた戦闘服で、あちこちに細かな武装を取り付ける金具がある。
もっとも彼女はそれらを使わず、剣帯を腰に巻いて細剣（レイピア）を提げていたが。
「行きましょう」
静かに告げる。着替えを手伝っていたマリーに向けてだ。

彼女が頷くのを確認して、ベアトリスは早足に部屋を出た。
「――あら？　この声」
と、マリーが唐突に言って、不意に明後日の方を見た。すると計ったようなタイミングで、そちらの方からなにやら騒がしい声が届いてくる。
『だーっはっはっはっは！』
「お兄様の声ですわね」
「みたいね」
つまりこの声のする方が、厩（うまや）の方向だということだろう。ブラムからの合図が聞こえたと同時、準備の少ない男ふたりで手早く行動に移ったに違いなかった。
「ロイったら相変わらずね。これは急がないと、ご馳走を食べ損ねちゃうわ」
足を速めた。ここまできっちり武装しておいて出番がないのでは、不完全燃焼だ――と、思い浮かべたその時だった。
「ええい、なんの騒ぎだ⁉　誰か来い！　私に説明しろッ！」
激した声が聞こえた。ケネスの声だ。『合図』の派手さと屋敷の異変で飛び起きてきたらしい。
「あちゃ。カチ合っちゃったか」
うへえと舌を出していると、廊下の向こうからケネスが姿を見せた。
「……殿下！　またあなたですか！　大人しくしていろと言ったでしょう！　まだ舌の根も乾いていませんぞ！」
――彼はひと目で元凶を見抜いたらしく、ほとんどひっくり返った金切り声で怒鳴ってきた。
「……討ちますか？」
気づくと、マリーは剣に手をかけていた。変わったところのある娘だが、剣士として――軍人としての覚悟の据わり方は本物だ。了承すれば本当にケネスの首を刎ねるだろう。
「手っ取り早くて素晴らしい案ね。でもやめておきましょう。……私に任せて」
見た目とは裏腹な、苛烈な行動指針を持つマリーを、仕草で下がらせた。歩み寄ってくるケネスに向き直る。
「はぁい、ケネス。遅くに騒いで悪いわね」
気楽に告げて、こちらからも歩み寄った。
――蛇顔の男、ケネス・コートルトは憎たらしい男だ。人間よりも馬に気を許す変人であり、横領と着服の常習犯

でもある。どちらかといえば悪人に分類されるような男。
だが、殺すほどの邪悪かと言えばそうでもない。少なくとも寂れた温泉街でしかなかったレムトールに『観光』という名の財産を見出し、磨き上げて商品にまで仕上げた手腕は本物だ。
そしてその手腕によって集められた人の流れや財は、間違いなくザヴァクを潤していた。国家に、民に対して確かな貢献をしていた。
小悪党として、民の税金を掠め取ったケネスは確かにいる。だが商人として辣腕を振るい、民に財産を持たせたケネスもまた、確かにいるのだ。
「……先のひどい音はなんです。私の屋敷の方から聞こえましたが。それに――あなたのその格好。よもや夜の散歩だなどとは言いませぬな」
「あら。言おうと思ってたのを先取りされちゃった。なによケネス、そういう口も利けるんじゃない」
ベアトリスはくすりと笑った。だがここしばらく立て続けに面倒事が降りかかって沸点の低くなっている小悪党は、いらいらと踵を床に叩きつけて叫んでくる。
「笑い事ではございません！　これはもう盗人などという騒ぎではない。暴動だ！　そして国家の象徴たる皇族が、国の中枢に近い皇妃が行うそれは、もはや明確な反逆ですらある！」
「そうね。……そうかも」
無茶をしている自覚はあったが、そういう言葉遣いは思い浮かんでなかった。だが言われてみれば、その表現はしっくりくるものだった。
ただ、より確かな表現にするのなら――
「そうね――これは反逆よ。ミオンを、愛しいあの子を殺そうとするヘクトルと、それを見ても止めようとすらしない皇帝に対する――ね！」
叫び、床を蹴った。唐突なその行動に、ケネスは反応すらできていなかった。もっとも、非戦闘員である彼だ。反応できたとしても対応は難しかったろうが。
「よっ、と……！」
大きく跳躍した。ケネスの顔に飛びつき、腿で首を挟んでから後ろ向きに体重をかける。
「ちょっと乱暴だけど、これでも慈悲をかけてる方よ。――優しく落としてあげるから、白目剥いて寝ちゃいなさい！」

我ながらひどいと思える文句で弾みをつけてから、ケネスを引きずり倒した。そのままの腕を腿の内側に入れ、ぎりぎりと締め上げる。
「ぐ、おおおお……！　は、離しなさい殿下！　な、なんというはしたない格好の技を！」
ケネスは深刻なのかコミカルなのか判断に悩む罵声をあげると、じたばたと暴れた。だが――技は既に完全に極まっている。
――三角絞め。その名の通り、足で作った三角形の中で相手を絞め落とす技だ。肉弾戦に特化したロイから戯れに教わったものだったが、思わぬところで役に立った。
「……ぬ、ぬぅ……ぅぅぅ……」
ケネスの呻きはどんどん力をなくしていった。そして、ややあって。
「……」
完全に落ちたと見えて、彼はかくんと首を落とした。
「っし。これでうるさいのは黙らせたわね」
「お疲れ様です、ベアトリス様――あら？」
「？　どしたの？」
――と、駆け寄ってきたマリーがぱちくりと瞬きしたので問うてみる。すると彼女はなんともいえない表情で、すっとケネスを指差した。
ベアトリスは指を追って視線をずらし――すぐにマリーの言いたいことを理解した。
「あーらら。案外むっつりスケベだったのね。馬とお金にしか興味ないと思ってたけど」
ケネスの股間。こんもりと盛り上がっていた。柔らかい女の腿で顔を挟まれていたのだから、まあわからなくもない反応だった。
「……ま、精々いい夢見てることね。現実ではまっぴらごめんだけど、夢想の中でくらいなら犯されてあげるわ」
彼女はにぃっと危険な笑みを浮かべると、あとは振り返りもせずに屋敷を出て行った。

◇

厩は既に大混乱に陥っていた。その中心にいるのはキルスとロイだった。彼らは互いの背中を預け合うように位置取りながら、十を越える武装した警備兵と派手に打ち合っている。
人数で言えば警備兵側が大幅に有利だが、見たところ戦況は拮抗しているようだった。

「――よし。パーティーは始まってるけど、ご馳走はまだ残ってるわね」
ずかずかと騒ぎの中心に向かった。そして声が届くような距離になると、淀みない動きで細剣（レイピア）を抜き、言い放った。
「――聞けッ！　この身はザヴァク帝国が第二皇妃、ベアトリス・エルト・ザヴァクである！」
覇気に満ちた一喝に、混乱が一瞬鎮まる。全員が思わず、といった顔でベアトリスを仰ぎ見ていた。それを視線で斬り刻むように見回しつつ、彼女は続けた。
「我々はいま、わけあって馬車を欲している。貴殿らは退くがいい。これは一切の妥協を許さない要請である。従わぬならば――」
言葉の途中で、しゃらんと鞘鳴りの音がした。マリーが得物を抜いていた。理由は目の前にあった。
警備兵たちは、誰ひとり動かなかった。武器を握ったままじっとしている。退く気はない。それがよくわかった。
――だが見たところ、忠義によるものではなさそうだった。全員漏れなく、悲痛な表情をしている。
無理もない。いくら皇妃の要請だろうが、勝手にケネスの馬たちを引き渡しなどしたら、あとが地獄だ。彼らにとってはいきなり現れた皇族などよりも、普段直接君臨しているケネスこそが真の恐怖なのだろう。
哀れではあった。板ばさみの苦しみは理解できた。だが退く気はなかった。
こちらも切羽詰っている。かかっているのはミオンの――愛しい我が子の命なのだから。
「……しゃあないわね。マリー。まずは突っ込んでロイとキルス君に合流。それからなるたけ殺さないように、でも派手に暴れましょう」
「はいっ」
マリーは即座に頷いてきた。それに振り返らないまま頷き返し、ベアトリスは地を蹴った。
――ようやくここまで来た。ミオンをまた抱き締められるところまで。ならばもう、この足が止まることはない。愛しい我が子を抱き寄せるまでは、止まりはしない――
「ッ殺（シャ）アアアアアアアアッ！」
地を蹴るごとに溢（あふ）れそうになる思考を、その咆哮（ほうこう）で吹き散らしながら。
ベアトリスはひとりの剣士に――否、牙を剥く獣になっていった。

二章　闇の中の脱出劇

「腹の立つ話だわ」
凍りついたように誰もが動けない中、その声は変わらず凛と響いた。
「まったく――戦場みたいな音で起こされたと思ったら別室に放り込まれて、今度は殺し合い？　次の出し物はなによ。ものによってはぶん殴るわよ」
どこか苛立ったように呟き、その声の主――ミオンはつかつかとこちらに歩み寄ってきた。それから、涼しげな目元をついとこちらに向けてくる。
「それ、退けてあげて」
「……ああ」
数秒前まで本気の殺意を纏っていた聖剣を引き、ブラムは呟いた。奇妙な感覚だった。この声に言われると、不思議と逆らう気分にならない。なんとなく従うべきだと思わされる、不可思議な引力がある。
（……これがベアトリスの言っていた、『時代に適しすぎた資質』なのかもな。なるほど。確かに強烈だ――）
思いながら一歩下がった。見上げてくるミオンの瞳が、そうしてくれと言った気がした。
彼女は意図を読んで動いたブラムに軽く目を見開いたが、結局こちらにはなにも言わずに数歩進む。
その行く先は、ついさっきまで死の縁にいた忠義者の騎士――シャルティの目の前だった。
「……殿下」
シャルティが呆けたように呟く。覚悟していた死が遠のき、どうしていいかわからなくなっているのか。
そして――身の置き場に困っている者はもうひとりいた。
「あの……」
小声が聞こえ、服の裾が引っ張られた。ニーナだ。焦がれていたミオンを目の前にして、しかし状況の異質さから動けずにいる。本当ならすぐにでも抱きつきたいところなのだろうが……。
「……気持ちはわかるが少し待て。ここで動くのは間抜けだぞ」
ブラムは聖剣を鞘に収めながら囁（ささや）きかけ、ことの成り行きを見守った。
「さて」

ミオンは短く呟き――すぐに続けた。
「歯を食いしばりなさい」
言うが速いか、ミオンの手が閃いた。景気よく音を立てて、シャルティの頬が張られる。見事なビンタだった。
「なぜ殴られたかわかる？」
「……シーツで簀巻きにして別室に隔離したから、でしょうか」
シャルティの答えは明瞭だった。ブラムは部外者ながら、それで事情を察した。
どうやら一階で聞いた情報は間違いではなかったらしいが――シャルティが機転を利かせ、ミオンを隠していたというのが真実のようだ。
「ええ、そうね。それもあるわ。なにせ懐剣を隠し持ってなきゃ到底脱出できないくらいに、執拗に拘束されたものね。……でもそれだけじゃないわよ」
ミオンは頷くと、ぐいとシャルティの胸倉を掴んだ。
「――騎士道、大いに結構。あなたの命とあなたの誇りだもの。好きに使えばいいわ。でも、それは私も同じよ。私の命に私の誇り。自由にできるのは私だけ。……勝手に背負って死に急ぐなんて、そんなことは許さないわ。言ってる意味、わかる？」
「……はい」
シャルティは、なにか反論を口にしようとしたようだった。そういう間があった。だが結局、ミオンの声が持つ力に説き伏せられ、ただ肯定の意を示す。
「……ん、ならばよし」
彼女はそこで、ふっと纏う空気を一変させた。顔を見なくても微笑んでいるとわかる、柔らかい空気に。
「わかったならそれでいいわ。……ったく、ずっとだんまりかと思えば急に無茶して。わかんない男ね」
ミオンは優しい声音で言うと、胸倉を掴んでいた手でシャルティの頭をさっとひと撫でした。明らかに彼女の方が年下だろうが、妙に似合いの仕草だった。
それから、彼女はゆっくりと振り返った。
「――で、なんだけど。……あんた誰？」
「……」
ブラムはとりあえず口を噤み、数度瞬きした。内心呟く。
（……すげえ女だな。なんも状況理解してねえくせに、雰囲気だけで場を制圧しやがったのかよ）
思っていると、ミオンが目を細めた。焦れたように続け

る。
「見た感じ、この馬鹿騒ぎの首謀者ってところなんだろうけれど。こんなところまで上がってきたってことは、狙いは私の首かしら？」
「……半分正解だ。あんたに用があるってのは確かだからな」
「へえ。賊が私にね。……で、なんの用だっていうの？」
語気はまったく怯んでいなかった。武装した賊――彼女にはそう映っている――を前にして、一歩も引く様子を見せないのは、気丈というのを通り越している気がする。
「あんたを迎えに来た」
「迎え？」
――そう言った時、ぴくんとミオンの片眉が跳ねたのを、ブラムは見逃さなかった。
「……そう」
彼女は目を瞑り、静かに頷いた。なにかを悟ったような声音だった。
「……自分で来ないってことは……相当無茶したのね、あいつ。ったく、私の周りにはそんなのばかり集まる……」
嘆息交じりの呟き。だがそれには、どこか嬉しそうな――歳相応の少女の感情がにじんでいた。
やがて彼女は目を開けた。そして言ってくる。
「あなた、アルの友達？」
「ああ。ここへは奴に頼まれて来た」
「ってことは、あなたはブラム・ディルモンドね」
名乗りもしないうちから言い当てられ、苦笑した。肩をすくめる。
「参考までに訊くが、なぜわかった？」
「簡単よ。あのヘソ曲がり、友達少ないもの。私の知る限りだと、噂の『勇者』くらいしか候補はいないのよ。しかもそれが、私が帝都に移送される前日に押しかけてきたとあれば……腹積もりもある程度読める」
打てば響く――そんな反応だった。なにを言ってもそこから情報を抽出し、理解を深めている。
「話が早くてなによりだ。一応身分証明になるよう、こいつを連れてきていたが……必要なかったかな」
言いながら腰にへばりついているニーナを引き剥がした。前に押し出す。
「あ、あの……」
いざ本人を前にしたら気後れしたのか、ニーナがもごも

ごと言う。対してミオンは、さっぱりしたものだった。
「あら、ニーナじゃない。久しぶりね」
言って、へっぴり腰のニーナの前で手を広げる。おいでと誘うようにだ。するとニーナはなにやら感極まったようで、
「ミ、ミオン様ー！　会いたかったですー！」
半泣きで抱きついた。ミオンはそれをおーよしよしと受け止める。
「変わらないわね。歳は私の方が下のはずなんだけれど。……あれ？　そういえばなんでこの娘がレムトールに？」
「ああ、そいつはな……」
――と、ブラムが説明を口にしようとした時だった。
『だーっはっはっはっは！』
『おーっほっほっほっほ！』
外からそんな声が聞こえてきた。もう馴染みとすら言える笑い声。馬車が到着した合図だろう。
「ハーレン兄妹……ってことは、お母様が戻られたのね。なら、やっぱりアルのところに走ってた、か。――まったくあの人は。ニーナまで巻き込むことないでしょうに」
「……ま、そういうことだ。降りれば迎えの馬車と母上様がお待ちかねってわけさ」
「そう。なら急ぐべきね。もう一方の『お迎え』とカチ合って修羅場なんて、肝が冷えて仕方ないもの」
ミオンは言うと、ニーナを抱擁している手を解いた。
「――行きましょう。手荷物なんてありはしないわ。ここにあるものは全て置いていく。くそったれに無力な私と一緒にね。……まさか、この期に及んで止めないでしょうね？」
最後のはシャルティへ向けた言葉だった。彼は肯定も否定もしなかった。ただ呟く。
「……鳥籠は壊された。ならば中の鳥が羽ばたくのは自明。それを止める権利は……誰にもない」
「……聞いてたの、あれ。まったく、案外耳がいいのね」
彼らのやり取りの意味はわからなかった。だが口を挟むべきではないということだけはわかった。
シャルティは数瞬黙ってから、こう続けた。
「……あなたが思うよりは、私はあなたが好きでした。金言の全てがこの胸の中にあります。……どうか、似合いの空へ羽ばたかれますよう」
「……そう。……行きましょう。もうここに用はないわ」

「あ、ミオン様！　ひとりで行っちゃだめです！」
ミオンはもう振り返らず、歩き出した。さっぱりとした去り際。それをニーナが慌てて追った。
「……へっ。これじゃどっちが迎えに来たのかわかりゃしねえな」
全てを見届けて、ブラムは呟いた。それから自身も部屋を出にかかる。
だが、彼はミオンほどさっぱりはしていなかった。最後に振り返り、未練がましく言葉を残す。
「シャルティ。拾った命だ。上手く使えよ。責を問われて首をもがれるくらいならきっちり言い訳しろ。『勇者』ブラム・ディルモンドにやられましたってな」
「……考えておく」
相変わらずの無骨な声だった。だが、返事があっただけマシかもしれない。
「ああ、とっくり考えな。もっとも……皇女にああまで言われて、悩まない騎士もいないだろうがな」
ブラムは肩をすくめると、今度こそ部屋をあとにした

――

◇

一階まで止まらず駆け下りると、まだ残っていたらしい警備兵と出くわした。寝癖のついたふたり組だ。非番で寝ていたのが、流石に無視できないと起き出してきたのかもしれない。
「殿下⁉　まずいですよ、部屋にお戻り――」
片方が状況を――皇女と賊が並んで全力疾走してくる様を理解して叫んだ。
だが――
「邪魔だ！」
「邪魔よ！」
――合図もなく、ブラムとミオンは同時に跳んだ。そして同時に、それぞれ拳と膝を兵たちの顔面にぶちこむ。拳句着地まで同時だった。
「――ベアトリスといいあんたといいひどいもんだな。最近の皇族は肉体言語が嗜(たしな)みなのか？」
「――あなたこそ、勇者のくせに拳骨が決め技なの？　腰の聖剣が泣いてるわよ？」
「わりとどっちもどっちです……」
鼻血を吹いてひっくり返る兵を尻目に囁き合うと、少し遅れてきたニーナが突っ込みを入れた。それに、ふたりは

やはり同時に肩をすくめる。
「ごもっともだが、こいつよりはマシだろう」
「あら失礼ね。私の方が技が美しかったでしょう？」
くだらないことを言い合う――と、その時。
「――ミオン、ブラム君、ニーナちゃん！」
屋敷の玄関の方から、ベアトリスが駆け込んできた。彼女はそのまま続ける。
「ちょいとまずいわ！　街の軍部が思ったより優秀だった！　馬車の周りにぞろぞろと来てるわ！　他の三人で踏ん張ってるけど、馬車を守りながらだとちょいきつよ！」
「なるほど。さっきの笑いは合図は合図でも、開戦の方だったか」
納得して呟く。自然にミオンと目が合った。
「まだ踊れるか？　いや、武器がないようだからお預けか？」
「武器ならあるわ。懐刀（とっておき）がね」
ミオンが本当に懐から短剣を取り出した。小さい刃。頼りなくも見えるが――
「問題ないわ。手入れしたばかりだし、手にも馴染んでる。それよりあなたこそお預けじゃない？　左腕からだらだら血が出てるわよ」
言われて気づいた。シャルティにつけられた傷がまだ出血している。だが見た目ほどに深くないこともわかっていた。
「かすり傷だよ膝蹴り皇女。心配には及ばねえ」
「そ。ならいいわ拳骨勇者。精々足を引っ張らないことね」
――アルという男を支点に出会ったふたりだからか、やり取りが軽妙だった。波長が合うとでもいうべきか。なんにしろ、ふたりは同時にふっと笑った。
「ニーナ。どうせ向こうも鉄火場だ。ゆっくりついてこい」
「お母様。積もる話はありますが――まずは切り抜けましょう」
それぞれ別のことを口にして、ふたりは走り出した。ぜえぜえ言っているニーナと迎えに来たベアトリスを置き去りにして、玄関を飛び出す。
「ちょ、待つですよ馬鹿勇者！　お前まだ左腕が！　私！　私は医療魔導師です！　せめて借りを返させるですー！」
「あ、こら！　……くっそー、人をのけ者にして仲良くしてからに。私も混ぜろ！」
置き去りのふたりもまたそれぞれに叫んで、外に向かっ

て走り出した。

◇

ミオンを伴って屋敷を駆け出ると、馬車の周りはなるほど鉄火場だった。

「押せ押せ押せー！　相手は少数だ、すり潰せぇぇぇぇ！」

「門の周りを固めろー！　そこさえ塞げば逃げ場はない！」

「ただでさえ軍部は予算が少ないんだ！　ここでしくじったらケネス様がなにをするかわからんぞー！」

ベアトリスの言葉通り、街の軍部から随分と出張ってきていた。三十はいるだろう。馬車はすっかり囲まれていた。辿り着くにはぶち抜くしかない。

「風穴を明ける。目を焼かれるなよ！」

ブラムは告げて、聖剣を抜いた。そして今日何発目かの聖剣技――光破飛燕を撃ち放つ。

「光よ、奔れ！」

命じて剣を振るうと同時、光の矢が放たれた。屋敷の中で撃ったものは屋内ゆえの加減があったが、これはそれすらない最大出力だった。

放たれた矢は暗い鉄火場を一瞬だけ明瞭に照らし出しながら、包囲の一画にぶち当たった。

『ぎゃあああ⁉』

予想外の痛撃を受け、兵がまとめて数人吹っ飛ぶ。包囲に風穴が明いた。

「お先に失礼」

風穴を潜り、ミオンが包囲の中に入り込んでいく。ブラムもそれに続いた。

素早く目を走らせた。馬車の右側ではハーレン兄妹が背中を預け合って奮闘している。そして左側ではキルスがひとりで、槍を振るっていた。元はベアトリスと組んでいたのが抜けて、そういう形になったのかもしれない。

「左を立て直しましょう。押し潰されたら詰むわ」

「同感だ。――いくぜ」

手早く打ち合わせて、ふたりはキルスの下に走った。そのまま、いま現在キルスと切り結んでいる兵に打ちかかる。その兵は不意打ちに反応しきれず、肩を斬られて後ずさった。

「――ありがてえ、勇者の兄ちゃんか。……ってミオン殿下もいんの⁉　しかも、なんで剣持って……え、おい。嘘だろこのまま戦うつもりかよ⁉」

キルスは援護したこちらの片割れが皇女だと知ると、面白いように反応した。だがブラムは意に介さず、にやりと笑う。

「濁さず言えよ。じゃじゃ馬皇女ってな。――いや、その暇もないか」

「――覚悟おおおお！　お、ぐおあ⁉」

叫びながら斬りかかってくる兵の、膝の上を浅く斬った。そのまま蹴りを入れて押し返す。だがその時には、次の兵が入れ替わるように襲ってきていた。

――ただしそれは、横から飛び出したミオンが短剣でひと撫でして片付けたが。

「ぎゃあああああ⁉　指がああああ！」

軽く振るったように見えたが、その兵の指は取れかけていた。余程切れ味のいい短剣なのか。

「悪いわね。でもこっちも余裕があるわけじゃないの。死にたくなければ退きなさい」

ミオンの声は冷え切っていた。脅しの意味もあるのだろうが、それにしても堂に入った演技だ。

（凄げる……が、ジリ貧だな。脱出できなきゃ意味がない）

思いながらちらりと正門を見やる。鉄格子は侵入する時吹き飛ばしたが、いまは代わりに人が群がって塞いでいた。

（あれを吹き飛ばさないと出られない、か。だがもたもたしてもいられねえ。街の軍がこんだけなわけもねえんだ。時間さえあれば、もっと洒落にならない数で押し寄せてくる。それに、馬車を出すにはもうちょい連中の数を減らさなきゃならん。……手はあるが、あれはちょいと『タメ』がいる。どうしたもんかね――）

――と、そんなことを考えていると。

「空破拳（エーテルフィスト）！」

呪文が聞こえ、背後で再び包囲を完成させようと動いていた兵たちが吹き飛んだ。また風穴が明く。そこから、ベアトリスとニーナが入り込んできた。

「――いいところに来た。ベアトリス、俺と代われ！　ニーナはロイとマリーをフォローしろ！」

「はいはい。皇妃使いの荒い子ねー」

「だからぁー！　左腕ー！　なーおーさーせーてー！」

ベアトリスの頷きと、ニーナの半泣きの顔とを交互に見やる。それからブラムは、ミオンにも指示をしようとして――

「言わなくてもわかってるわよ。私はここで、槍の苦手な

間合いをカバーしてるわ」
ミオンはキルスの肩を叩きながら言って、短剣を握り直した。苦労人の槍使いは『マジすか』という顔だったが。
それに苦笑しながら、ブラムは一度聖剣を鞘に収めた。
それから地を蹴った。御者台に飛び乗り、さらにそれを蹴って跳びあがる。そのまま屋根のヘリを掴み、引きつけて屋根に着地した。
「悪いが加減はしねえ。余裕がないんでな。当たり所が悪けりゃ死ぬが――恨むなよ」
再び乱戦に突入した地上を睥睨して、呟く。そのまま屋根の上で聖剣を抜き、意識を集中する。
（こいつは久々だ。らしくない繊細さも必要になる。……しくじるなよ、俺――）
思考から敵以外の姿が消えた。そうする必要があった。
刀身が燐光を纏った。時間をかけてじっくりと高まっていく。やがてブラムの体全てを覆うほどになった。
（出力は十分――あとは狙いだ）
破壊力そのものは聖剣が生み出してくれる。だが制御に必要な負荷は全てブラムの脳にかかっていた。
敵の数は多い。正門を塞いでいるのと周囲のとを合わせれば四十に届くだろう。必要なのはそれと味方とを区別する制御だった。当然、容易いことではない。
ぎりぎりと脳が軋んだ。それは錯覚だったろうが――そのくらいの集中力が必要だった。
だがやがて、ブラムの意識はかちりとピースがはまり込む感覚を得た。照準が合ったという確信があった。
「光よ――」
集約した力を解放するための呪文（キーワード）を口にする。そして彼は聖剣を振り上げ、技を完成させた。
「――降り注げ！」
瞬間――光の塔が夜空を突き上げた。圧倒的な力の奔流が力を増しながら吹き上がり続ける。そして光の尖頭（せんとう）は、ある一点に達したところで、ぱっと弾けた。
――聖剣技、光雨死降（こうしこう）。名の通り、死すら予感させる光の矢を雨の如く降らせる技だ。光の矢はその全てがブラムの制御下にあり、なおかつひとつひとつが光破飛燕（こうはひえん）に等しい威力を持っている。
「ぎゃあああっ⁉」
「うげ、がはっ……！」
絶え間なく降り注ぐ破滅的な雨に打ちのめされ、次々と

兵たちが倒れていく。最終的には誰ひとりとして、立っていられなくなっていた。
「――オーケー、全滅させた！　ずらかんぞてめえらっ！　馬車に乗り込め！」
叩き伏せた敵をざっと見回して、ブラムは叫んだ。邪魔な敵が消えた以上、こんなところに長居は無用だ。
「まるで山賊の頭ね」
「そしてお前は強奪されたお宝ってわけだ。……アホなこと言ってないでさっさと乗れ！」
軽く言い合ってから、ミオンが馬車に乗り込んだ。御者台に向かったロイを除けばこれで全員だ。
「勇者よ！　お主はどうするのだ⁉」
と、その御者台に上ったロイから問いが飛んでくる。即座に叫び返した。
「構うな、出せ！　途中で残りの連中とカチあったら目も当てられねえ！　街から出るまで、ここで弓兵ごっこでもしてるさ！　――それにこんな時間だ。正門は閉じてるだろ。悠長に開けてる暇はねえ。射程距離に入ったら大技でぶっ壊す！」
「――委細承知である！　だが飛ばすぞ、振り落とされてくれるなよ！」
豪快な声での返答と同時、馬に鞭が入った。これまでの大騒ぎでやや萎縮していた馬たちが、『今度はなんだよ⁉』とばかりに嘶く。だが二度三度と鞭が振るわれると、諦めたように進み始めた。
「――さて。頼むから余計な茶々を入れに来るなよ。例によって加減はしてやれねえんだぜ――」
徐々に速度が増していく中、ブラムは聖剣を握り締めたまま、祈るように呟いた。
――結果として、それは取り越し苦労となった。
皇女強奪を果たした一行を乗せた馬車は、幸いにもそれ以上敵襲に遭うこともなく、順調に街の正門まで辿り着いた。
しかも――
（……なんだ？　門が開いてやがる）
ご丁寧に、正門は開いていた。こんな時間だ。本来なら門が閉まっているところなのだろうが。
（――そうか。ミオンを迎えに来るはずの帝都の部隊。到着は朝方って話だったな。開いてるのはそれでか）
考えているうちに、馬車は門を潜って街の外へと飛び出

した。門番が悲鳴をあげてひっくり返っていたが……まあそれは仕方ない犠牲だ。
「……」
ブラムはしばらく、聖剣を握ったままその場に留まっていた。ここまで来てなにか不備があっては泣くに泣けない。
だが――数分経っても、なにも変化はなかった。馬車は夜の暗闇の中をひたすら進んでいる。
「……とりあえず、剣はもうよさそうだな」
呟きながら納剣し、とりあえずその場に座り込む。
「一段落、か……」
いずれ皇女（ミオン）を奪い返しに本格的に派兵してくるだろうが――レムトールの領主は軍事を苦手とするとも聞いている。散々に掻き回しておいたこともあるし、兵をまとめるには少し時間がかかるだろう。
（不安があるとすれば、帝都の部隊が到着後すぐこっちを追ってくることだが……それでも、よっぽどの高速部隊でなけりゃ問題ないはずだ）
空を見上げた。いま気づいたが、雲がいくらか散って月がよく見えるようになっていた。
「晴れ、か」
頭を掻いて立ち上がった。と、その時。目の前が歪み、頭がふらついた。
「……左腕、止血サボったのはまずかったな。思いっきり貧血じゃねえか。ここまで来て転落死なんて笑えもしねえ」
ブラムは苦笑して、ふらつく頭を軽く小突いた。

三章　追手の影

——美貌というのは時として武器にもなる。

ケネス・コートルトは背中いっぱいに嫌な汗を浮かべながら、それを噛み締めていた。

窓から街を見渡すと、既に昇っている太陽と、いくつも立ち昇っている白い煙が見て取れた。

各家庭で炊事が始まった証だった。レムトールという街が起床し、一日を始めた合図ともいえる。

（……そう。一日が始まった。つまり朝だ……）

ケネスは視線を窓の外に向けたまま、陰鬱に呟いた。視界の端に爆砕された屋敷の正門と、戦場のように怪我人で溢れている庭が映ってさらに憂鬱になるが、それは無視した。

「——コートルト卿。そろそろ景色は見飽きたのではないか？」

——と、冷淡な声を浴びせられて、彼は思わず頬を引きつらせた。それでも視線は動かさなかったが。

「だんまりか。中々の歓迎振りで痛み入るな。——帝都からはるばる足を運んだというのに、肝心のミオン殿下がいない。しかもベアトリス殿下まで取り逃がした。挙句……卿はずっと寝ていて、ことの詳細はまったく把握していないときた」

淡々と、声は続けてきた。内容は昨晩起きた、ケネスの人生最大の災難を簡単にまとめたものだった。

いまケネスの執務室には、彼自身を除いて五人の人間がいる。ひとりは先ほどから冷たい声を投げつけてきている、見るからに軍人といういでたちの女で、この集団の頭というべき人物だ。

名をヴィオーラ。『聖騎士』ヴィオーラ・ルクス。帝国随一の戦士であり、魔王討伐一行に名を連ねた英雄でもある。

そして残りはといえば、これまた軍人の女たちだった。彼女らは今朝方到着した皇女を出迎えるための部隊の一員で、無論のこと全員が正当な帝国騎士である。

「……私とて、枕を高くして寝ていたわけではない。賊に……いいや。謀反（クーデター）を企てたと見えるベアトリス殿下自身の手にかかり、気を失っていたのだ」

一列に並んで侮蔑交じりの視線を向けてくる女騎士たち

に気圧されつつも、そう口にした。舌鋒は彼の数少ない特技で、言い訳も熟練の域に達している。心はどうあれ舌は勝手に動いて、言うべきことを言ってくれていた。

だが――

「言い訳だな、それは」

ヴィオーラはきっぱりと断言してきた。氷柱のように冷たく尖った視線が、ざくざくと胸に刺さる。

――わかってはいた。どう言い繕おうが結果は出てしまっているのだと。

第一皇子ヘクトルから『くれぐれも頼む』と預かった第三皇女ミオン、並びに第二皇妃ベアトリスが、昨晩未明にこの街を去っているのは紛れもない事実だ。外部から侵入した賊の手によって、誘拐されたのだ。

しかもいまのところ行方の手がかりすらなく、また下手人の情報もない。屋敷を任せていた守衛どもはあらかた怪我人と化しており、聴取は思うように進んでいなかった。

「……ふう。まったく面倒な」

――と、不意にヴィオーラが軽く頭を振り、嘆息した。視線が一瞬外れ、青みのかかった美しい銀髪が細い肩をさらさらと撫でる。完璧な所作だった。嘆息すらも絵になる、筋金入りの美人だった。

だが――それ故に、ケネスは恐怖を覚えていた。

（……くそ、小娘のくせになんという圧だ……！）

――美貌とは時として武器になる。先ほど思い浮かべた感想が再び身に染みてくる。度を越えた美人の真顔とは、かくも恐ろしいものなのかと冷汗すら吹き出てきた。

後ろで控えている四名の女騎士たちも、随分綺麗どころを集めたものだという按配だ。だがヴィオーラの美しさはその比ではなかった。そのあまりに整いすぎた美貌は、ただそこにあるだけで見る者を恐怖させる。

彼女はしばらく、無言の圧力（プレッシャー）を周囲にばら撒いていた。だがやがて、なにやらもごもごと呟き始める。

「……胸騒ぎがすると思ったら、案の定これだ。死ね。誰だか知らんが悶え苦しんで死ね」

物騒な内容だった。だが顔は無表情のままで、それがかえって恐ろしい。

「いや。むしろ殺そう。わたしが自分で殺（や）ろう。原形すら残さず砕こう。皇族の誘拐犯などどうせ引き回しの上に晒し首だ。いっそそれが情けだろう――」

彼女はなおもぶつぶつと、恐ろしいことを呟いていた。

だが、しばらくするとぴたりとそれをやめた。
ライトブルーの瞳がこちらを捉え直す。イミテーションの宝石を思わせる、輝きだけは一人前で、味わいというものを持たない淡白な瞳……。
「まあいい。起きたことは起きたことだ。なにがあろうがわたしの任務は変わらん。殿下には帝都に来ていただく。迎えの距離が伸びたと思うことにする」
ヴィオーラが瞳の光と同じかそれ以上に淡白な調子で呟き、そのあまりの冷淡さにケネスが喉を鳴らした――その時だった。
「――失礼します。シャルティ・クレイス、お呼びと聞きましたが」
「――！　は、入れ！」
ケネスは扉の外から聞こえた声に、椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がった。同時に扉がゆっくりと開いて、ひとりの男が現れる。無骨な面構えの若い兵だった。
「――シャルティ、貴様！　いままでどこで油を売っていた⁉」
ケネスは怒鳴りながら、シャルティに詰め寄った。というよりは、ヴィオーラの傍から逃げるような心地だった。
もっとも、怒りがあったのも本当ではあった。シャルティはミオンの警護を直接やらせていた兵だ。ゆえにケネスは本邸に戻って惨状を確認したあと、真っ先に話を聞くべく行方を捜したが――結局見つからなかった。そしてイライラしているところにヴィオーラ率いる聖騎士隊が到着し、こうして針のむしろに座らされて、いまに至っていた。
「申し訳ありません。負傷者があまりにも多い中、自分は動けましたので。そちらの救護にかかりきりでした」
岩が口を利いたような、無骨な返答だった。ケネスはそれに舌打ちしつつ、シャルティの胸倉を掴みあげようとして――
「待て」
――横から出てきたヴィオーラに、あっさりと止められた。
「無駄なことをするな。冷静さを欠いた尋問などクソの役にも立つものか」
ヴィオーラは言うと、ついとシャルティを見やった。
「訊きたいことがある。全てに答えろ。嘘があれば殺す。いいな？」
「は。なんなりと」

脅しのような文句にも、シャルティはただ頷くだけだった。だがそれでも、彼の意識はヴィオーラだけに向き、ヴィオーラの興味も彼の持つ情報にのみ集約していく。ケネスの存在は視界にも入らなくなっているのが手に取るようにわかった。

（こ、こいつら……）

愛想というものが致命的に欠けた男女が、無機質な視線を絡め合うのを脇で見ながら――

（こ、ここは私の街だぞ……!?）

ケネスはそう、情けない心地で呻いた。

◇

――『聖騎士』ヴィオーラは目の前の男の顔を、しばらく眺めていた。シャルティと名乗った若い兵卒の、どうということのない真顔。

（嘘が上手いようには見えんな）

無骨な顔つきや言葉遣いから、そう判断する。だが直後に、こう呟きもした。

（ふん――だが、わたしは嘘を見抜くのが下手だからな。どっこいだ。悩むだけ無意味か）

冷たい美貌とは真逆の、男らしいとすら言える割り切りでそう断じて、彼女はこう切り出した。

「まずひとつ。そもそも殿下はご無事か？」

「は。恐らくこの屋敷の誰よりもお元気であられるかと」

シャルティの返答に迷いはなかった。少なくともこの男が知る限りにおいては、ミオンに危害が加えられてはいないのだろう。

「そうか。なによりだ。では次だ。下手人の顔は見たか？」

「は。屋敷に上がってきたのはふたり組でした。ひとりは若い男、もうひとりは子供のような女。他にも数名、馬車で庭に乗り込んできましたが……私は男の方に敗れていました。ゆえに、顔までは見ていません」

「ほう」

ヴィオーラはそこで、ふと引っかかった。じっとこちらの目を見ていたシャルティが、この問いの間だけ目を逸らしたのだ。あまりにもわかりやすい反応だった。

（この男。わたしと同じかそれ以上に嘘が下手か）

思いながら、問いを追加した。

「見たところ貴様もやるようだが。少なくとも、そこらの賊にやられるタマではないだろう。――相手は余程の手練だったか？」

「――――」
――シャルティが言葉を止めた。目も露骨に泳いだ。犬より隠し事のできない男のようだ。
「どうした。答えろ。それほど難しい問いではないはずだ」
「……」
詰問した。端へと追い込むように鋭く。するとシャルティは口をへの字にし、顔中にびっしりと汗を掻き始めた。いよいよ顔に『隠し事があります』と浮き出ている。だがそれでも、彼はまだ黙っていた。迷うような間だった。
だが、しばらく待つと――
「……下手人は名を名乗りました」
――シャルティは観念したように告げた。ヴォオーラは無言で目を細め、先を促す。
「あなたも、いえ……あなただからこそよく知っている名です」
彼は頷き、そう前置きした。
そして――その名を呟いた。
「ブラム・ディルモンド。奴はそう名乗りました」
「――――なに？」
思わず聞き返した。声が低くなる。疑いの声だった。
聞き覚えのない名だから――では無論ない。むしろ馴染みがありすぎたからこその疑念だ。
「き、貴様！　いまはくだらん冗談を言っている場合ではないのだぞ！」
ふとケネスが怒鳴った。それこそつまらない冗談だと思ったのだろう。
だが――
「……！　……庭の、損傷……」
ヴィオーラはケネスの激情など無視して、つかつかと部屋の窓に歩み寄った。そのまま、破壊された庭を見下ろす。
跡形もなく吹き飛ばされた正門、穴ぼこだらけの地面、いまなお転がっている負傷者の群れ――順番に見やって、彼女は舌打ちした。
（――そういう目で見れば符合する。奴の力――聖剣技に。……これは爆砕棘光（ばくさいきょっこう）と光雨死降（こうしこう）か）
思い浮かぶのは、皮肉げな顔つきと言語を絶する殺人技能、そしていま聞いたばかりの名前だった。
（――ブラム。貴様か。貴様がやったのか。……ああ、そうか。あの胸騒ぎはこのことか）
内心でだけ呟き、彼女はそのまま振り返った。そして、

こちらをじっと見やっているシャルティに――ケネスに胸倉を掴まれているが、まったく気にした様子もない――告げる。
「シャルティとか言ったな。情報に感謝する。だが最後にもうひとつ訊きたい。……奴はどこへ行った？」
「……自分は見ていないので、正確な情報ではありませんが。ライルという門番が、南へ走り去る馬車を目撃したとは言っていました。轢かれかけたのを慌てて避けて怪我をしたらしいので、よく覚えているとも」
「――ああ、あの男か。額から血を流していたから何事かと思ったが」
名前は知らなかったが、ヴィオーラがレムトール入りした時に迎え入れてくれた門番がいたのは覚えている。『ちくしょうなんでオレばっか』と陰気に呟いていたのが印象的だった。
（南、か。……元魔王城（ダンジョン）の方向だな）
ブラムというキーワードのせいか、すぐに思い浮かんだのはそれだった。魔王殺害という同じ目的を持ち、かつてともに挑んだ魔境。
（まさかな。いまさら奴があんなところに……。いや、いまはそれはいいか）
深みに入りかけた思考を、頭を振って散らした。いまはとにかく、可能な限り素早く行動しなければならない時だ。
「コートルト卿」
「――っ。な、なんだ？」
呼びかけると、ケネスはどもりながら答えた。それに、端的な質問をぶつける。
「貴様は馬を持っていたな。それも希（まれ）に見る良馬を数多く持つと聞く。それを寄越せ。ありったけだ」
「……は？」
ケネスはぽかんと口を開けると、シャルティの胸倉から手を離した。それから、泡を食った様子で怒鳴ってくる。
「な、なぜ私の馬を！　ただでさえあの皇妃（あばずれ）に、選り抜きのを持ち去られたばかりだというのに……！」
「とりあえず、いまの不敬な発言には目を瞑ってやる。だが寝ぼけた頭はそろそろ叩き起こせ。保身に長けた貴様ならわかるはずだ。これだけの失態を犯して、首が繋がるとでも思うか？」
「そ、それは……！」
わなわなと手を震わせる、ケネス。立て続けのトラブル

で麻痺していた思考が、少しは回り始めたか。だが彼の調子が戻るのを待ってやる義理もない。
「ヘクトル殿下は貴様の能力を――金を生み出す手腕を評価してはいる。だがそれでも、今回の失態をカバーできるほどのものではない」
ケネスの、そしてヴィオーラの上司である第一皇子ヘクトルは、比較的失敗に対して寛容だ。彼が重視するのは平均値であり、目先の利益ではない。長い目で見た場合、その人物が自分に利益をもたらすかどうかを見るのが、彼の人の使い方だった。
だからこそ、ケネスのような癖の強い――つまりは不正の多い――者でも重用された。差し引きすれば有用に傾くと思われていたから。
だが……
「最低限、ミオン殿下だけでも取り戻さなければ、失脚どころの話ではないぞ。そんなことはわたしにすらわかることだ。そして、わたしとてこの状況は好ましいものではない。お連れすべき方がここを発ったなら、わたしはそれを追わねばならない。それが任務だからだ。だが、わたしの隊の馬は帝都からの強行軍で疲弊している。走れぬほどではないが、とうに走り去った馬車に追いつくには馬力が足りん。だからこそ、貴様の馬が――」
そこで言葉を切った。ケネスがぎりぎりと奥歯を噛み締めるのが見えたからだ。
「……くそ。くそ、くそっ。ああ、わかった。わかったっ！好きなだけ連れて行くがいい！」
「いい返事だ。無事ミオン殿下を取り戻したら、貴様の判断をヘクトル殿下に伝えよう。多少は汚名が返上できるだろうさ」
なんの慰めにもならないことを告げて、彼女はケネスの肩をぽんと叩いた。それから、ちらりと部下に視線を投げる。
「カミラ、トルノ」
待機している女騎士――部下のうち、ふたりを選んで呼びかけた。すると髪色も肌の色もばらばらの連中の中から、静かにふたりが進み出てくる。
長い黒髪に褐色の肌を持つカミラ・レトナーグと、茶色いクセっ毛でこちらも褐色の肌を持つトルノ・ベルだ。
「なんでしょう」
訊いてきたのはカミラだった。

「逃げた馬車を追う。あとは任せる」
いまはとにかく、ミオンの所在を突き止めなければ話にならない。ゆえに最優先するのは機動力だ。次点で、馬車を見つけた時に足止めできる戦闘力が必要になる。その点で言えば、ヴィオーラ自身が単騎で動くのが最も効率がいい。そう判断しての命令だった。
だが――
「……お言葉ですが。ことは一刻を争います。どうせ追うなら全員で向かうべきです。それなら見つけ次第、殿下をお救いできます」
カミラが返してきたのは了承の言葉ではなかった。ややきつめの目元をきゅっとつり上げ、挑むようにこちらを見てくる。
「却下だ」
「……っ。理由を。納得するに足る理由をお聞かせ願えますか！」
カミラは食い下がってきた。正直かなり鬱陶しい。それこそ一刻を争う事態で、こんな時間は無駄でしかない。
「シャルティの情報通りなら、相手の中に勇者（ブラム）がいる。無駄な死人を出す気はない」
「理由になっていません。強敵ならばなおのこと、万全の戦力で追うべきです。……それとも、また手柄の独り占めをなされたいとでも？」
「……」
ヴィオーラは黙った。図星を指されたからではない。あまりにもアホらしくて言葉が出なくなったのだ。
確かにこの隊で動いたここ最近の仕事では、ほぼ全ての功績がヴィオーラの手の中にあった。だがそれは単に、彼女ひとりが前に出た時点で終わるような仕事ばかりであったというだけで、強いて手柄を欲したことなど一度もない。
そんなことをしなくとも、彼女の持つ『聖騎士』という称号そのものが、誰にも真似できない偉業の証だ。
ふと、他の者にも視線を向けてみる。誰かひとりくらいこの馬鹿者を止める者がいやしないかと。
だが結果は芳しくなかった。仮にも上官に意見したカミラに対して、嫌悪や叱責の気配を見せる者はひとりとしていなかった。それどころか、皆カミラの意見を支持しているようにすら見える。トルノなど、カミラの横でうんうんと頷いてすらいた。
（……元はそれぞれエリートだったらしいが……無駄な気

位の高さだ。殺意が湧くな）

この隊は精鋭でありながら即席の急ごしらえでもあった。正確には、ヴィオーラが頭として君臨するようになったのが最近だということだが。

だが正直、知ったことではなかった。ヴィオーラが隊長に就任したのは第一皇子ヘクトルの意向だ。文句があるなら彼に言うのが筋だろう。

もっとも――それができない理由にも見当はついているが。

（機嫌取り……というよりも、余計なことを上奏して機嫌を損ねたくないというところか）

……この隊は元々、ヘクトル肝いりの隊だった。士官以上は全て女性という奇特な構造の、帝国でも珍しい部隊だ。無論、そんな珍奇な部隊が生まれたのには理由があった。

この部隊はつまるところ、ヘクトルの玩具箱だった。愛人に役割（ポスト）を与え、手放さないように仕舞っておくための玩具箱。

（いや……これも無駄な思考か。これ以上、くだらんことで時間を使うわけにもいかん）

どうせこの馬鹿どもは、なにを言っても聞きはしないだろう。ならばとりあえず連れて行き、土壇場で置いて行った方が話が早い。

「――いいだろう。そうまで言うなら全員着いて来い。ただし命の保障はしない。繰り返すが相手は勇者（ブラム）――殺戮と破壊の申し子だ。部下を全滅させる覚悟を固めておけよ」

「……脅しても無駄です。我らは皆、ヘクトル殿下のために尽くす覚悟がある。それは部下たちも同じこと」

カミラは――他の騎士も同様だが――相当に意固地になっているようだった。告げたのはただの事実で、脅しでも何でもないというのに。

「そうか。では好きにするがいい」

ヴィオーラは様々なしがらみを、ひとまず思考から消した。淡々と続ける。

「では改めて命じる。カミラとトルノは馬の準備だ。いま交渉したように、コートルト卿の私物の使用が認められた。別宅からありったけ連れてきて馬具をつけろ。急げよ」

「はっ」

カミラとトルノは同時に背筋を伸ばした。態度は反抗的だが、馬の扱いについては一流の技術があるふたりだ。準備に手間取ることはないだろう。

「ヤオ、エイナ。お前たちは兵に準備をさせろ」
「御意に」
隊の中で古株のふたりが頷く。どちらも落ち着きのある人柄で、兵からの支持も篤い。強行軍の直後に決まった出立ゆえ、兵からは不満も出るだろうが――彼女らなら上手くやるだろう。
「よし。では各員役割を果たせ。――解散」
告げると、四人の部下は敬礼ののち部屋を出て行った。もっとも、その背中にはヴィオーラへの反骨心が透けて見えていたが。
「……くだらん。任務が遂げられれば手柄など知ったことか」
ヴィオーラは吐き捨てつつ、また窓の外を見た。破壊の空気を色濃く残す、無残な庭を見やる。
（……ブラム、か。ふん。久々に命のかかった任務になりそうだ）
彼女はすっと目を細めながら、近く訪れるであろう死闘を想った。

◇

レムトールを脱出して、三日経った。
馬車がいまいるのは、行きにもちらりと見えたラムザ・ビレッジの傍――つまりダンジョンまでは長くとも四日、速ければあと三日で着くような距離のところだった。
いまのところ後方から猛追してくる部隊の影などはない。また野盗の類に出くわして足止めを食らうということもなかった。見上げている空は快晴で、車を引く馬の調子もいい。このまま行けば、特に問題なくダンジョンまで帰り着けるはずだった。
……だが。ブラムはそんな順調な行程に反して、どうにも晴れない気分を持て余していた。
（……なんだろうな。これがつまり運命とか、宿業って奴なのかね）
そのふたつの違いについて、なんとなしに考えてみて――結局彼はどうということのない結論に不時着した。
即ち……別にどっちであろうと、降りかかってきた災厄そのものには影響しない。原因について考えて出せる益とはつまり、予防策でしかないからだ。
（なら――既に厄介ごとが約束されている現状じゃ、綺麗さっぱり無駄な考え事か）
寝転がっている馬車の屋根から転げ落ちないようにバラ

ンスを取りながら、彼は苦笑した。
と、その時だった。
「……お、おーい。ブラム・ディルモンドー」
「……ニーナか」
聞こえてきた声に、むくりと身を起こした。だがその場から動くことはせず、そのまま問いを放つ。
「どうした？」
「その。そろそろ、左腕をまた治療しておきたいのですが」
ニーナが風の音に負けないように声を張った。ブラムはそれに、ああと呻いてから答える。
「それならもう、概ね完治したろ。まだカサブタはあるが……魔法を使うほどの傷じゃない」
軽く左腕を振る。動きに問題はなかった。出血も止まっている。ここ二日、ニーナが付きっ切りで医療魔法をかけてくれた結果だった。
「ただでさえ、俺に魔法を効かせるのは重労働なんだ。あんまり根をつめてお前がぶっ倒れたら本末転倒だろ」
「……しかし、ですね」
ニーナの返事は鈍かった。納得してないのだろう。
「別にお前の腕を信用してないってわけじゃねえんだ。事実、俺の体に魔法を届かせた技量には驚かされた。そうはいないんだぜ、かすり傷とはいえ俺の体を癒せる術者ってのはよ」
慰めるようなつもりはなかったが、結果として口調は丸いものになった。それに苦笑しながら、ブラムは続けた。
「それに……こっから先、ミオンあたりが怪我をしたらどうする。俺にかかりきりで消耗して、肝心の相手を癒してやれないんじゃどうしようもねえんだ。……借りを返したいって気持ちはわかるが、それはもう十分にもらったさ。聞き分けてくれ」
「……。わかりました」
声音には、まだまだ納得していないという気配もあったが――彼女はとりあえず引き下がった。それから、とぼとぼと車内に戻っていく。これは見えたわけではないが、足音がいかにも弱々しかったのですぐにわかった。
（……真面目なのが思いっきり悪い方に出てるな。ったく、かすり傷ひとつでそう気に病むなってのに）
「――悪い男ね」
「？　……なんだ。今度は君か、ミオン」
まだ聞き慣れていない声に、一瞬判断が遅れた。だが思

い出せないほど印象の薄い声でもない。
なんとなくつられて、声のした方に目をやる。するとミオンが、皇女とは思えない身軽さでひょいと屋根によじ登ってきていた。
「危ねえぞ」
「その危ないところで寝転がってたのは誰よ？」
「そうじゃねえ。スカート捲れんぞって言ってんだよ」
茶化しつつ、あまり寄ってくれるなと警告する。ブラムはいま、とある事情で少々気が立っていた。だから空を見上げて、気を静めるのに努めていたのだ。
「別にいいわよ。減るもんじゃないし」
だが、ミオンはまるで頓着しなかった。すたすたと無造作に距離を詰めてくる。一応スカートは押さえていたが。
「で、悪い男ってのは俺のことか？」
「ええ」
ミオンが頷くのが気配で知れた。彼女はすぐ背後から、からかうような調子で言ってくる。
「ニーナを追い返したでしょう。あんな可愛い娘に懐かれて、なにが不満なの？」
「不満ってわけじゃねえさ。強いて遠ざけたいわけでもない。ただ……な。この先のことを考えると、戦力は可能な限り残しておきたいんだ。なにせ相手はあの女だからな……」
なんとなく言葉を切った。言いにくいというほどのことではないが、いざ口にしようとすると詰まる。ブラムの胸中を曇らせているのは、そういう微妙な事柄だった。
ブラムは横たわった沈黙から目を逸らすように、空を見上げた。毒気のない青色が、どこまでも続いている。
（……特別好きな色じゃないが……嫌いな色でもない。それでも気分が晴れねえのは、まあ……そういうことなんだろうな）
順調なはずの行程を素直に喜んでいられないのには、心当たりがあった。この青空からもなんとなく想起させられてしまう、現状最大の心配事。
「……そんなにきつい相手なの？」
こちらと同じように空を見上げ、ミオンが言う。
「……聖騎士ヴィオーラ。帝国では名を知らぬ者のない戦士ね。あなたにとっては昔の仲間でもある。でもあなただって『勇者』でしょう。出会う前から殺気立たなくてもいいと思うけれど」

「……そりゃ、あいつをよく知らないから言えることだよ」
ミオンが告げた名とその評価に、ブラムは小さく苦笑した。
――昨日。ひとまずレムトールからの追撃の気配がなく、なんとなく全員の気が緩みかけたところで、ミオンが釘を刺すように言ってきたことがあった。それがつまり、聖騎士ヴィオーラの存在であり……ひいてはいずれ彼女がこの馬車を追ってやって来るだろうという、絶望的な未来図でもあった。
もっとも時間的に考えれば、いくらなんでもいますぐ修羅場になることはない。彼女は怪物だが空を飛べるわけではないし、超長距離の空間転移を行えるわけでもない。
だが――
「それでも、心のどっかがざわめいてんだよ。いまにもあいつが『天の衣』を纏って突撃してくるんじゃねえかってな」
「そう……」
ミオンは静かに呟いた。そして――唐突に別のことを口にしてくる。
「昔の仲間と戦うのは辛い？」
「……」
ブラムはそれに、ふと無表情になった。図星を指されて怒ったわけではなかった。ただ、浮かべるべき表情が自分でもわからなくなったのだ。
だがやがて、彼は相応しい表情を見つけた。苦笑を浮かべる。笑みというには苦味が強すぎる気もしたが。
「……ミオン。君が聡いのはわかったよ。だがあまり心を見透かさないでくれ。うっかり飛び降りたくなっちまう」
ベアトリスもそうだったが、このミオンという女も中々にやりにくい部分がある。アルに近いほど聡く、だが彼ほどドライに言葉を操るわけでもない彼女は、時々鋭すぎる言葉でこちらの心臓を抉ってくる。
「……戦えば、どっちかは死ぬだろうな。あいつはそういう女で、俺もそういう男だ。それに……敵はあいつだけじゃない。きっと後ろにぞろぞろ連れてきてる。それも相手にするとなると、死体が出すぎるんだよ。でもって、そういう結末がけったいだと思ってるのは……まあ事実さ」
「勝てない、とは言わないのね」
「これでも元は勇者だからな」
皮肉な気持ちで言いながら、聖剣の鞘を撫でた。すると

ミオンは、また小さく『そう』とだけ頷いた。
「……ふう。どうも邪魔になっただけみたいね」
「邪魔ってほどじゃないさ。その気遣いを受け取れないほど余裕がないわけでもない。……君の母親の仕掛けで、行きがけに解決したこともある。それでも残った凝りだから、こうして頭を抱えてるんだ。……だからこれは、どうしようもないことなんだよ」
運命――あるいは宿業。不治の病とも似たそれは、つまるところ死ぬまで解決しない。ずっと付き合っていくしかない話だ。
ミオンには――あるいは、彼女だからこそ理解できる話かもしれない。皇族の血という呪いを身に宿した彼女には、こうしたどうしようもないしがらみは身近なもののはずだ。
だからか。彼女はもうなにも言わなかった。こつこつと遠ざかる足音が聞こえてくる。
それに向けて、ブラムは振り向かないまま告げた。
「ミオン。なにがどうあろうと、君はアルのところに届ける。だから君は、アルに抱き締められる瞬間のことだけを考えてろ」
返事はなかった。代わりに、乱暴に御者台に着地した音だけが返ってくる。
「……難しい女だ」
ブラムはまたごろんと横になりながら、苦笑混じりにそう呟いた。

◇

車内に戻ってきたミオンは、どこか不機嫌な様子でどかりとニーナの横に腰を降ろしてきた。
「ど……どう、でした？」
むすっとした顔で腕組みなどしているミオンにやや気後れしつつ、ニーナは訊いた。すると彼女は、お手上げとばかりに万歳した。
「駄目ね。処置なしよ、あれは」
ついと天井を――ひいてはその向こうにいるブラムを見やりつつ、彼女は続けた。
「体調が悪いわけではなさそうで、精神的に追い詰められてるって感じでもなかったわ。機嫌が悪い……というのも違ったわね。狩りを前にして昂ってる獣、というのが近いかしら」
「そう、ですか……」
自分が声をかけた時はすげなく追い返されてしまったが、

ミオンの言葉であればあるいは――そう思っていたのだが、どうもあてが外れたらしい。それに思いのほか強い落胆を覚えつつ、ニーナは頭を抱えた。

（うう……これではいつまで経っても借りが返せないです……）

呻くように呟く。ブラムはもう十分だと言っていたが、ニーナにしてみればまだまだ足りないとしか思えなかった。確かに傷自体は驚くほど軽傷だったので、あまり気に病むのも妙なのかもしれなかったが……。

（いえ……問題はそこではないです。着目すべきなのは、私の命が危なかったという事実。そしてそれを回避したのがあやつだということそのものなのです）

生来の生真面目さを盛大に発揮して、ニーナはきゅっと口元を引き結んだ。

「――まあ、ヴィオーラ・ルクスについて一番よく知ってるは彼だしね。ナイーブになるのもわからなくはないかな」

ちょうどニーナの正面に座っているベアトリスが、苦笑混じりに呟く。それから彼女は隣に座っているマリーにちらりと視線を向けた。

「こーなったら、もう一回ぐらい『アレ』やっとく？」

ベアトリスはにやにやしつつ、そんなことを言った。微妙に言葉がぼかされていて、ニーナにはなんのことだかよくわからなかった。

だが、マリーにはそれで通じたらしい。なにやらぽっと顔を赤らめつつ、

「ええ。私は一向に構いませんわ。むしろ望むところです」

またニーナにはわからないことを呟いた。

「……お母様。マリーとふたりだけでわかり合わないで。なんの話なの？」

ベアトリスはそれに、にやにや笑いを深めながら答えた。

「行きの道で彼を寝かしつけるのに、一計を案じてね。マリーと一緒に馬車の中に押し込んで……しっぽりヤってもらったの」

「……え？」

――と、これはニーナ自身の声だった。我ながら間抜けな調子だ。だがそれに値するだけの驚きがあったのは事実だ。

「え、あの……ベアトリス、様？　それ……本当です？」

マリーとブラムが交わったなどという話は初耳だった。というか、ずっと一緒にいたのにどうやってそんなことを

したというのか。
「……あれ？　言ってなかったっけ。ほら、レムトールに着くちょっと前くらいに、ブラム君とマリーを重点的に休ませるぞーってのやったじゃない。あん時よ、ふたりでぬっちょぬちょになってもらったのは」
ベアトリスは言いながら、握り拳の人差し指と中指の間から親指を出すという、なんともアレな手つきをした。発言も相まって非常に下品である。
「お母様。たまには皇妃であるということを思い出してから行動して。私も大概な自覚はあるけれど、それはもう女としてどうかと思うわ」
「えー？　別にいいじゃない。ねえ、キルス君。女がエロくて悪いことなんてないわよねー？」
「……？　あ、俺……ですか？」
――と、不意に話を振られたキルスは、窓の外の景色に奪われていた意識を慌てて車内に向けたようだった。取ってつけたような敬語を操り、彼は続けた。
「あーっと、まあ。話聞いてなかったんであれですが。……まあ、いいんじゃないですかね？」
「うわ、ザ・適当って感じの返事。なによ、私の話より景色のが面白いの？　……どれどれ、なに見てたの？」
「あ、いや別に、大したものじゃ……ただ、ちょいとラムザ・ビレッジを――」
そんな具合に、話は見る間に逸れていった。まあ、雑談というのはこんなものかもしれないが。
「――？　……どうしたのよ、ニーナ。ぼうっとしてるけど」
「へ？　あ、いえ。なんでもないです……」
思わず嘘を吐いた。ミオンに対して、初めて吐いた嘘だった。
正直心苦しかった。彼女にだけは正直でありたかった。
だが――
（い、言えない。言えないです。『それ』なら……体を使えば、魔力を使わずに借りを返せそうだ、なんて……）
雑談をよそに思いついてしまったのは、そんなどうしようもない案だった。とてもではないが、敬愛するミオンに言える内容ではない。
「……そう？　ま、いいけど」
ミオンはまだ不思議そうな顔だったが、とりあえず追求はしてこなかった。それにほっとしつつ、ニーナはふと天

井を見上げた。
いまも屋根の上で殺気を放っているであろうブラム。聖騎士ヴィオーラを警戒するあまり、必要以上に張り詰めている。それをどうにかできるなら、それは立派に借りを返したと言えるのではないだろうか。
（……やってやるです。体を張られた借りは、体で返すですよ！）
十数年間こじらせ続けた生真面目さを中々アレな方向に爆発させている彼女は、具体的にそれをするのがどういうことなのかを深く考えられないまま――とりあえず決心だけを固めた。

◇

そんなこんなで、夜――
「大は小を兼ねる。そうは思わねえか、兄弟」
「またそれか」
夜番の折、焚き火越しにキルスが言ってくるのに、ブラムはとりあえずそれだけを口にした。だが素っ気無いその答えにも、キルスはまったく怯んだ様子はなかった。
「まあ待てよ。今度はおっぱいの話じゃない。また別の話さ」
「……？　じゃあなんの話だよ」
相変わらず寒い夜の空気に辟易しながら、ブラムは眉を寄せた。羽織った外套（マント）の襟を立てつつ、キルスの言葉を待つ。すると彼は、にやりと笑ってこう言った。
「今回の議題はずばり――そう、女のケツについてだ」
「結局下ネタじゃねえか」
即座に突っ込みを入れる。だが、キルスもまたすぐに言い返してきた。
「そうつんけんしなさんな。前にも言ったろ。男同士ならこいつは鉄板だとな。それに今回は俺たちだけじゃねえ。旦那もいる」
と、彼はブラムから見て右側に腰を降ろしているロイに目を向けた。その視線を受け、大柄な拳士がごつい手で顎を擦る。
「むう。女人の臀部の話であるか。あまり考えたことはないが――うむ。やはり大ぶりである方が好ましくはある。なにせ我輩の手自体が、余人よりも大きいのだからして」
「うむ、じゃねえよ。なんでノリ気なんだよてめえ。そういうキャラじゃなかっただろが」
言いながら半眼を向ける。するとロイは肩をすくめて

――筋肉が多いので実に四角い肩だ――あっさりと言ってきた。
「いや、我輩もいい歳の男だからして。このような話はわりと好きであるぞ？」
「……そーかい」
ブラムはなんとなくぐったりしつつ、小さく呻いた。キルスはそんなブラムににやりと笑いかけてきながら、ぱっと腕を開く。
「ほーれみろ。堅物っぽい旦那ですらこんくらいは喋るんだよ。ほら、観念して性癖をばらせ」
「へいへい。……しかし、ケツねえ。あんま考えたことはねえな。だが……まあ。確かにでかい方がそそるかもしれねえな」
女の尻と言われて思い出したのは、いつかダンジョンで嬲った女冒険者――ヒルダ・ローレンスだった。やや筋肉質に寄ってはいたものの、彼女の大きな尻は確かに魅力的ではあった。
「お、意見が合ったな。――そうだよ、でかい方がこう、女！って感じがしていいよな」
キルスはなにやら身振りを交えて、そんなことを言ってきた。理想の大きさを宙に描いているらしい。ロイは横でうむと頷いている。というか彼も宙に手を伸ばしていた。それによると、彼の望む尻はキルスよりさらに大きめのものらしい。
それをぼんやりと眺めながら、ブラムは嘆息した。
（こいつら余裕あんな。……まあ、俺が気にしすぎなのかもしれんが）
内心でだけ呟く。――と、その時だった。
（――なんだ？）
人の気配を感じ、ブラムは反射的に聖剣に手を伸ばした。ふと見やると、キルスとロイも腰を浮かせている。馬鹿な話をしていても警戒を解いていないあたりは流石だ。
だがその十全の警戒も、今回は取り越し苦労だった。
「……？　なんだ、ニーナ嬢ちゃんじゃねえか」
キルスが拍子抜けしたように呟いた。そしてちょうどそのあたりで、ブラムは後ろを振り返った。
停めてある馬車の方から、小さい人影が近づいてくるのが見えた。覚えのあるシルエットはキルスの言った通り、ニーナのものだった。
「どうした嬢ちゃん、こんな時間に」

「べ、別になんでもないです……」
訊かれて、ニーナはなぜか気まずそうに目を逸らした。そのまま小声で言ってくる。
「……ブラム・ディルモンド。ちょっと付き合うです」
「……俺？」
首を傾げて聞き返す。ニーナはこくんと頷いた。それから答えも聞かずに、逃げるように歩き去っていく。着いて来いということらしい。
（……なんだ？　またぞろ治療させろって話か？）
思いながらキルスとロイに視線をやった。ふたりはどうということのない様子でただ頷いた。
「あー、こっちは気にすんな。ふたりいるし、なにが起こるわけでもないだろうさ」
「うむ。行ってくるがよい」
「……そうか。じゃあ」
ブラムはわけがわからないまま、とりあえずニーナを追って歩き出した。

四章　ニーナ・デトルムの返礼

焚き火や馬車があるところから数分とない位置で、ニーナは立ち止まった。元はちょっとした茂みになっていたようなのだが、いまは時期が時期なので葉は枯れている。

「……んで、なんだよ。こんな暗がりに連れ込みやがって」

とりあえず連れ出したブラムが、軽い口調で言ってくる。恐らくだが、まだこちらの意図には気がついていない。

意図――つまりは昼間固めた決心を、早速実行に移そうという気でいたのだ。それはつまりこの男とナニをするということで、それには人目があっては困る。だからこうして、仲間のところから引き離したのだ。

ちなみに彼女はいま、寝巻きではなくいつもの魔導師服を着ていた。スカートの丈をいつもよりだいぶ短くして、精一杯『セクシー』を目指した結果である。

「……ブラム・ディルモンド。腕の調子はどうです？」

いきなり本題に入るのは憚られ、とりあえず当たり障りのない話題を振る。するとブラムは、訝しげに目を細めた。

「あん？　……まあ、別にどうってほどのことはねえよ。厳密には完治じゃねえが、動きに支障はない。……これは昼間も言ったろ」

「ですか」

ニーナは短く相槌を打つと、すっと一歩、ブラムに近づいた。それから手を伸ばし、ブラムが纏っている外套（マント）の隙間に差し入れる。

（と、とりあえず手から……）

男を誘惑した経験などない彼女は、拙（つたな）い知識を総動員して、少しずつ行動を起こすことにした。外套（マント）の中でブラムの手を探り、ようやく見つけてぎゅっと握る。

「……おいおい。こいつはなんの儀式だ？」

「ぎ、儀式じゃないです。これは、検査ですよ」

焦った末の、口から出任せだった。正直既にテンパっていた。だが言ってしまったものは仕方がない。このまま続けるしかなかった。

「……魔法は使うなと言いましたね。消耗するからと。それは私も理解したし、納得したです。でも……お前の怪我は腕だけに影響するものじゃなかったです。出血がひどくて貧血を起こしていたでしょう。だから、全体的な検査をですね……」

「……そりゃまあ、お前は専門家だし、必要だってんなら文句はねえが……。にしたってこんなクソ寒い中、外でやるこたねえだろ」
ブラムはひとまず誤魔化されてくれたようで、嘆息混じりにそう言ってきた。ちらりとこちらの目を見て、また嘆息する。
「わかった。お前の好きにしろ。だが立ったままじゃ疲れるな……」
彼は言うと、その場に腰を降ろした。胡坐を掻いてどかりと座る。
「お前も座れ」
手を引かれた。外套（マント）の前を開いて招き入れるように顎をしゃくってくる。少し躊躇（ちゅうちょ）したが、結局導かれるままブラムの足の上に座った。見た目以上にがっちりした足で、ニーナ程度の体重だとびくともしない。
「んで？　検査ってな、なにをするもんなんだ？」
「ま、まずは脈を取るです……」
言いながら抱きついた。我ながら意味不明だった。体格差があるので、ニーナの頭がちょうどブラムの心臓のあたりに来ているが――普通、脈はこんな形で取らない。
「……なんか違わないか？　普通は手の動脈で取るもんだろ」
「う、うるさいです。デトルム家ではこうするのですよ」
案の定突っ込まれ、反射的に言い返す。無論嘘だった。ごめんなさい父上適当言いましたと内心詫びつつ、さらに抱きつく力を強める。
そうして、ブラムの胸に耳を押し当てた。それからまた呟く。
「……ちょっと鼓動が早いですね……やっぱり、どこか調子が悪いのでは？」
「……いや、こんだけ密着されりゃ、多少はな……」
ブラムはどこか気まずげだった。だがニーナはその反応に、少しだけ手ごたえを感じた。
「い、いえ。やっぱりどこかおかしいです。というわけで、触診（しょくしん）を……」
我ながら苦しい展開の仕方だったが、勢いで押しきった。そろそろと手を、ブラムの腹あたりに這わせる。これも別に触診の動きではなかった。本命は――もっと下の方にある。
（こ、このまま徐々に下にいけば……いよいよアレが）

ごくりと喉を鳴らしつつ、ニーナは手を降ろしていき——やがて『その場所』に触れた。思ったよりも熱い、ブラムの男根に。

「——おいこら。どさくさに紛れてなにしてんだ。いくらなんでもそこは触診の必要ねえだろ」

流石のブラムも、これには黙っていなかった。はっしとこちらの手首を掴み、制止してくる。

「そ……そんなことはないのです。これはれっきとした、デトルム家の触診法でですね……」

「いや嘘だろ。実家の流派を話の流れで汚してんじゃねえよ馬鹿が」

「う、うるさいです。診察中は静かに！」

正当な理屈ではもはや打開不能と見て、ニーナは開き直った。こうなったらもう、この勢いだけでいけるところまで走るしかない。

強引に、両手をブラムの股間に向かわせた。勃起させればこちらのものだと、半ばやけくそで手を動かす。すると、少しずつだがブラムのズボンが盛り上がってきた。

「……腫れてきた……ですね」

「腫れてきたって、お前な……」

呆れたように言ってくるブラムを見上げた。ここまで来れば、そろそろ意図が伝わったのではないのかと。

すると——

「……ったく。なんとなく察しはつくけどよ。一応訊くぞ。……いいんだな？」

——ブラムは静かに言った。

どうやら、意図は伝わったらしかった。この体で、女としての自分で借りを返す。命を救われた……あるいは負わせてしまった傷の返礼とする。それを、理解してくれたのだろう。

視線が絡んだ。すると、いまさらながらにどきどきしてくる。思いつきのままに突っ走ってしまったが——思えば、男とこういう空気になることなど初めてだ。どこか艶めいた空気は、ニーナの動悸を一気に激しくさせた。

だがそれでも。

「……はい、です」

ニーナははっきりと頷いた。

◇

小さな体が、腕の中でかすかに震えている。ふたつほど年下の……ただし見た目には五つは年下に見える女が。

（ニーナ、か。……正直、そういう目で見ることはなかったが……）

緊張した様子でこちらを見上げてきている彼女は、綺麗というよりは可愛いというべき顔つきだ。体だけでなく、顔そのものもこぢんまりとしている。言動の幼さも相まって、それこそ子供のように思えるほどだ。

それを静かに見下ろしながら、ブラムはふっと苦笑した。散々ガキだなんだと言っておいて、いざ迫られてみたら存外あっさりと欲情している自分がいる。しかも彼女は、別に自分に好意を持っているというわけではなく、ただ償いがしたいだけなのだ。

それでも腕の中に閉じ込めた小さな体は温かく、柔らかさは心地いい。手放す気はさほど起きなかった。

（我ながら節操がねえな。……いや、案外そうでもないのか？）

やや失礼なことを思い浮かべてから、それを打ち消した。彼女は確かに、グラマーとは言いがたい体型だが――脚に伝わっている尻の感触は、想像していたよりもずっと肉感的だった。

（女の尻はでかい方がいい、ね。……ま、そうかもな）

先ほど男同士で交わしたくだらない会話を思い出しつつ、ニーナの体を抱き直した。左腕で背中を支えながら、右手を顎に添える。くいと引いて、逃がさないように捕まえた。

「……リードする。しばらく任せろ」

「……」

ニーナは黙っていたが、返事は別のことで示された。彼女はそっと目を閉じていた。ついでに言えば、ほんの少し唇を尖らせてもいる。……震えながらだが。

（この様子だと、なにもかも初めてか。……ま、それならそれでやり方があるか……）

思いながら、体を前に倒した。体格差があるので、口づけるのも少々工夫がいる。

「ん……」

触れるだけの口づけをした。ニーナがかすかに息を漏らす。体も一気に強張った。やはり緊張しているのか。

「嫌だと思ったら言えよ。どうせなら、お互い愉しい夜の方がいい」

顔を離して囁きかけた。持ち得る中で最も丸い声を使う。するとニーナはゆっくりと目を開けて、小さく首を横に振った。

「……本当に嫌なら、いくら私でもこんなことしないです」
「そりゃなによりだ。……もう一回、いくぞ」
小さな頭が頷いた。また目を瞑り、雛鳥のように唇を突き出してくる。そこに口づけを落とした。
今度は少しだけ長くそうしていた。それから、また顔を離した。
「……男も、唇は柔らかいですね」
「知らんよ。生憎そっちの気はなくてな」
冗談めかして言い、頭を撫でた。続けて、右手をそっと背後に回していく。
まず背中を撫でた。円を描くように、ごくゆっくりと愛撫する。するとニーナの体から、強張りが少しずつ抜けていくのがわかった。
「……あの。すぐ、入れないです？」
——と、不意にニーナが言ってきた。一瞬なんのことだかわからなかったが——ああと納得して、ブラムは苦笑した。
「お前が慌ててどうすんだ。……準備がいるんだよ、こういうのは。お互いにな」
言いながら手を滑らせた。腰骨を通り過ぎ、双丘に向かう。スカート越しでも十分に、割れ目の感触が伝わってきた。
「ん……くすぐったいです」
「ああ。最初はそういうもんだ。でもって……それが気持ちよくなるくらい昂ったら、ようやっと挿入だ。……初めてなんだろ？」
こくんとニーナが頷く。だろうなと笑いかけた。
「なら……愉しい夜にするには、なおさら準備が必要だ。いいな？」
あやすように言って、そのままニーナの尻を撫でた。まだスカート越しの愛撫に留める。それでも愛撫に性的な気配が加わりはした。
「……なんか、ぴりぴりってするです。ヘンな感じ……」
時折ぴくんと震えつつ、ニーナはその愛撫を受け入れていた。そして、それが数十秒すぎた頃——
「ひゃうっ」
——スカートの中に手を潜り込ませると、ニーナは軽く仰け反って声を上擦らせた。直に触れられて驚いたらしい。
「……な？　尻を撫でられただけでこれだ。慣れないと無理なのはわかるだろ」

「……ですね」
自分で自分の反応に驚いたのか、ニーナははにかんだ。それから、ついと顔を上げてくる。
「ん」
また唇が尖った。口づけろということらしい。
「気分が出てきたか？」
「……わかんないです。でも……ちゅーはキライじゃないです」
どうも『好き』と同意の『キライじゃない』のようだったが、それには触れなかった。彼女もこの夜を愉しむ努力をしているのだろう。無碍にするのは無粋というものだ。
求めに応じて、口づけをした。息継ぎをしながら何度も。そうしながらニーナの双丘を撫でる。やはり思いのほか肉付きがよく、触り心地は極めて甘美だった。
「ん、ふあ……んん……」
ニーナの息が、徐々に甘い気配を帯びていく。それに応じるように、ブラムもまた昂りを増していった。
（……しっかり女なんだな、こいつも。なら……）
ちろりとニーナの唇を舐めた。彼女はぴくんと反応する。驚いたような仕草。
だがすぐに、きゅっと強く抱きついてきた。そのまま今度は、こちらの下唇を舐めてくる。
何度かそれを繰り返した。そしてその何度目かで、ふたりのタイミングが噛み合った。舌同士が触れる。ぬるりとした感触と、生の他人の体温が伝わってくる。
そこで一度顔が離れた。ニーナの顔を見やる。どこかとろんとした表情だった。艶事の毒が回り始めたのかもしれない。
「いまの、もう一回……」
「ああ」
目で合図してから、今度は最初から舌と舌を触れさせた。ぴちゃぴちゃと、どこか淫猥な音が鳴る。
「気持ちいいか？」
「ん……」
はっきりとした答えはなかった。だがぽっと顔を赤らめながら小さく口を開いているので、訊くまでもないことだったかもしれない。
尻を撫でていた手を引いた。また背中に回す。逃がさないように抱き直した。そのまま強く口づける。
ニーナの口内は、容易くブラムの舌を受け入れた。整っ

た歯列をなぞっても、舌を絡めても抵抗はなかった。
「ふぁ……んむ、んん……ふぅっ」
彼女は見る間に、艶っぽさを増していった。体がくったりと脱力し、体温がどんどん上がっている。
「……気に入ったみたいだな」
「……はい」
至近距離で囁くと、ニーナはまたはにかんだ。その愛らしい笑みには、少女のような青い魅力があった。
「……そろそろ、他にも触れてみようか」
「……任せるです」
短いやり取りをして、ブラムはニーナの体を抱いている腕を解いた。ニーナの座る向きを変えさせる。向き合っていたのを、後ろから抱きすくめるような格好にした。
魔導師服の裾を掴んで軽く捲り上げた。脱がしはせずに胸の上あたりに固定する。それでちょうど、ニーナの乳房が完全に晒される。といっても外套（マント）の中の出来事なので、外からはうかがい知れないことだが。
なんにしろブラムは、ニーナのささやかなふたつの実りに手を伸ばした。すっぽりと掌で覆うように触れる。
「……その。そこはあんまり楽しくないと思うですよ」
――と、ニーナが自信なさげな声で呟いた。サイズを気にしているらしい。確かに揉むというより被せる形になる大きさではある。
「そうでもないさ。抱いてる女の体は、どこも魅力的に見えるもんだ」
言いながら、ごくゆっくりと愛撫を始めた。乳房の周りに指を這わせ、じっくりと撫でていく。ニーナはくすぐったいのか身を捩（よじ）った。
「逃げるなよ。そら、こういうのはどうだ？」
反応が素直なのが気に入って、別の刺激を加えてみた。指を立ててくすぐってやる。ただし激しくはせず、ゆっくりと。
「ひぅっ……しょ、しょれやめるですぅ……あふ、ひううっ」
ニーナは笑い声混じりの悲鳴をあげると、刺激から逃げるようにぐっと後ろに身を倒した。だがそこにはブラムの体があるので、大した意味はない。
「駄目だ。しばらくこうしててやるよ」
悶えるニーナを、しつこく指先で弄んだ。乳首には触れないまま、ずっと乳房をいじめてやる。すると段々、ニー

ナが汗ばんできた。逃げようとする動きも激しくなってくる。
「そ、そんなにした、らっ……ヘンに、なるですよぉ……」
彼女は困ったように言って、もぞもぞと腰を蠢(うごめ)かせた。
「おっと。そんなに尻を押し付けるなよ。……それとも、当たってるソレがもう欲しくなったか？」
なんとなく嗜虐心を掻き立てられて、意地悪く告げる。先ほどからブラムの男根は、ニーナの尻の後ろにあった。その上でニーナが悩ましく腰を動かすので、ぐりぐりと刺激されて完全に勃起していたのだ。
「お、お前……急に意地悪ですね」
少しだけ怒ったように、ニーナは言った。だがブラムが手を動かし、わずかに硬くなり始めた乳首をそっとひと撫ですると——
「ん、んん……こ、こら。話の途中で……ひゃんっ」
怒りの声は悩ましい喘ぎに化けて、さらにブラムを愉しませた。
「まだまだあるぞ。……こういうのはどうだ？」
ブラムは薄く笑い、ニーナの首筋に口づけを落とした。そうしながら、また乳首に触れる。今度は軽く摘むようにして、くりくりといじめた。それができるくらいには、もう彼女の乳首は勃起していた。
「あ……ん。ふぅっ……ひゃうっ」
ニーナの声。そろそろ、嬌声と呼べるくらいの甘さが宿っていた。体もそうだが、心が官能に向けて開き始めている。前向きに性感を受け入れる準備が整いつつあるようだ。
「……ニーナ。触るぞ？」
乳首を嬲る手を止め、あえて合図した。それが必要な部位に触れるつもりだった。ニーナは数瞬ほど迷ったようだったが——やがてこくんと頷いた。
手を静かに降ろした。乳房からみぞおちの窪み、ヘソ、下腹と順番に撫でた。それからさっと、スカートの中に指先を潜り込ませる。
下着越しに、ぷっくりとした土手を優しく撫でた。そこから少し指をずらすと、わずかに湿っている部分に行き当たる。すると、腕の中のニーナがびくんと震えた。恥ずかしいからか、あるいは別の理由か。
「直にいくぞ」
返事は聞かなかった。下着の隙間から手を差し入れる。一瞬だけざらりと恥毛の感触がしたあと、熱い淫肉が指先

に感じられた。
「……いい具合だぜ、ニーナ」
指先で感じたのは温度だけではなかった。少しだがぬめり気もある。湿ったという表現では追いつかない、確かな欲情の証。
「……お前、やっぱり意地悪です……。いいじゃないですか、言わなくても……」
ブラムは苦笑した。いじけたような態度に、言いようのない愛らしさを感じていた。
「悪かった。詫びといっちゃなんだが……」
右手の指を蠢かせた。愛液を潤滑液にして、割れ目をそっとなぞる。同時に左手も動かした。こちらは場所を決めず、ニーナの体の前面を気紛れに弄り、またはくすぐって愛撫した。
「ひうっ。あ、あ、あ……あっ」
ニーナが耐えられない、というように体を捩った。ひくひくと卑猥に腰を揺らし、先の尖った愛らしい乳房をかすかに揺らして悶える。声も言い訳のしようがないくらい甘くなっていて、鼻にかかっていた。
そうしてニーナを翻弄しながら、ブラムもまた昂りを自覚した。先ほどから、勃起がどんどん強まっている。ニーナの■さと女らしさが混じった特殊な媚態が、それを促していた。
だが――まだそれを、彼女にぶつける気はなかった。
彼女が指から逃げようと腰を動かす度に男根が尻に捏ねられても、愛らしくも悩ましい声に獣性を刺激されても、じっと耐えていた。
（悪い癖、なんだろうな。最後の最後まで、女を乱してやりたくなるのは――）
自嘲したが、自重はしなかった。
指の動きを激しくした。膣内に指を入れ、陰核を擦っていく。
「お、お前……そ、そんなにしたら、私い……」
「ああ。イキそうなんだろ？　いいぜ、イっちまえ」
「そ、それじゃあ意味が……お前を、気持ちよくしないといけないですのに……！」
ニーナは息を荒らげ、汗を掻き、股からとろとろの愛液をにじませながらそんなことを言ってきた。『借りを返す』というのが頭のどこかに残っているのだろう。
だが――

「いいんだよ。女が善がるのは男のためでもある。……まずは見せろよ、お前が『女』だってところを」
言葉を止め、ブラムは指の動きを変えた。激しくしていたものを急激に緩やかにする。だがその数秒後には、ニーナの陰核を根元から摘んでくりくりと扱いていた。
それは止めを刺すための動きであり、追い詰めるための緩急だった。
「あ、あ、あ、あ……！　い、いくです……先に、イっちゃうですぅっ――んんむっ」
ぴくんと腰を浮かせて、ニーナは叫んだ。だが途中でブラムが強引に唇を奪ったので、声もまた途中でくぐもっていった。すると彼女は、さらに激しく体を震わせた。お気に入りの愛撫――口づけで追い打たれて、絶頂が一段深いものになっていた。
「ん、ふうっ。うう、くふぅっ！　ん、ん、んんぅ……」
ニーナの震えは、徐々に収まっていった。だがそれに反比例して、目の力がなくなっていく。とろんと蕩けて戻らなくなる。
そしてしばらくして、ブラムが顔を離した時には――
「ふあ……気持ち、いいですぅ……」
すっかり女の顔になったニーナが、くったり脱力して身を預けてきた。

◇

――体が熱い。燃えるようだ。
ニーナは月明かりの下、自らの体に起こり続ける変化を持て余していた。
「ふ、あ……あうっ」
声が漏れた。はしたない声が。肌がとてつもなく敏感になっていて、どうしても抑えられないのだ。
「なんで、こんなに……あっ」
くちゅりと秘所で水音がして、ニーナは仰け反った。ブラムの指はごつごつとしていて、いかにも男の指、という感じだったが……触れ方は妙に繊細で、決してニーナの淫情を冷ますようなことはしてこない。ゆっくりと、あるいはじっくりと触れて、じわじわと真綿で締め上げるように追い詰めてくる。
不思議な感覚だった。あのダンジョンで辱めを受けた折にも、この体は燃えるように熱くなったものだが――それといまとでは、明らかに違った。
（なんで……？　お、男にされてるからでしょうか……？）

際限なく高まる淫情に、ニーナは困惑していた。
「ブ、ブラム・ディルモンド……」
隙あらば漏れ出る嬌声を押し退け、どうにか口にした。すると肌をさいなむ官能の疼きがピタリと止まり、代わりに低い声が耳朶を叩いてきた。
「なんだ？」
至近距離からのその囁きは、それはそれでニーナの背筋をぞくぞくさせたが――なんとか耐えた。
「さ、さっきからずっと……私ばっかり、その……気持ちよく、なってるです。そろそろ、お前も……」
彼女はぷるぷると震えながら、どうにかそれだけを言った。すると背後で、苦笑の気配が弾けた。
「俺は別に、このままでも構わんが？」
言葉と同時、愛撫が再開された。秘所から手が引かれ、両方の乳房が弄ばれる。乳首はもうとっくに勃起していて、敏感な果実に成り果てていた。それを弾くようにされると、ぴりぴりと痺れるような感覚が襲ってきた。かと思えば乳輪からじっくりと撫でられたりもして、それはそれで脱力を伴うような官能が弾ける。
そして最後には首筋に口づけが降ってきた。その柔らかな愛撫がもたらす刺激は甘美であり鮮烈で、ニーナはまた身悶えさせられてしまう。
「うにゃっ、きゅうぅぅ……や、やめるですっ」
「そうは言ってもな。……お前も感じてるだろ？　お前が乱れれば、それだけ俺も昂ってくると」
言いながら、ブラムは軽く腰を押し付けてきた。ちょうどニーナの尻の割れ目あたりに当たっている男根の感触が、ぐっと鮮明になる。ズボン越しのはずなのに、硬く熱い肉槍がそこにあるのだとはっきりわかる。
そして――それを意識すると、ニーナの体にまた変化が起きた。動悸がさらに激しくなり、肌の感覚がそこに……男根に触れている部分に集中していく。気づけば彼女は無意識に、腰を揺すっていた。
体格に比べて実りのいい尻肉が、とうに準備万端であろうブラムの肉槍を擦る。それはひどく卑猥な動きだったが、時間をかけて追い詰められたニーナは、もう気にするだけの余裕を失っていた。

◇

（そろそろ、かね）
むっちりした尻肉に男根を刺激されながら、ブラムは顔

には出さずににやりとした。経験が浅いというニーナを貫くに当たり、執拗なまでに体を解していたのだが――それももう十分らしい。

それになにより、ブラム自身も限界が近かった。間近で触れ続けたニーナの媚態は毒となり、ブラムの体を侵している。

「ニーナ」

耳元で囁いた。これまでよりも低く、そして強い声音。お前を犯す――そう言外に込めた囁きだった。

「……やっと、その気になったですか……」

ニーナは一度だけぴくんと震えたが、答えは確かなものだった。ただし声に含まれる甘さはこれまでの比ではなく、おびただしい『女の艶』を帯びたものでもあった。

無言で、ニーナを抱いていた腕を解いた。彼女は心得たように一度腰を浮かせると、邪魔になる下着を取り払った。その間にブラムもまた、ズボンの前についているボタンを外し、下着をずらして男根を露出させる。

そしてニーナが再び腰を降ろしてきて、体を預けてきた時には、男根が直にニーナの尻肉に触れていた。

「ふあ……これが、お前の……」

その熱さと生々しい感触に、ニーナは熱く吐息した。ブラムもまた、ニーナの柔尻の感触を直に感じ取り、抱きすくめる力を強くする。

しばらくの間そうしていた。助走をつけるような心地だった。

だがやがて、その時が来た。呼吸を合わせて、高く跳ぶ時がやってきた。

「入れるぞ……」

「ど、どんとこいです」

ニーナが軽く腰を浮かせた。ブラムはそれに合わせ、男根を掴んで狙いを定める。見えていない中での挿入。手間取る可能性はあったが――

「――あっ」

――ぬぷ、と亀頭が温かな穴にはまり込む感覚を早くも得て、それが取り越し苦労だと悟った。

「力を抜いて体を預けろ。……たぶん痛いが……」

「だいじょうぶ、です。覚悟はしてるですよ」

短いやり取りのあと、ニーナは自ら腰を降ろしにかかってきた。亀頭がしっかりと、狭い膣内に飲み込まれる。さらに進むと、少し引っかかった。処女膜。これまで異物の

侵入を阻んできた最後の砦。
「い、いくですよ」
ニーナが呟き、腰を浮かせていた足の力を完全に抜いた。当然、処女膜に全体重を支える強度などあるはずもなく。
「――あ、いぃっ……!?」
短い悲鳴があがった。いくら体を解したとはいっても、膜が引き裂かれれば痛みは出る。こればかりはやむを得ないことだった。
「……少し休むぞ。ほら、ちゃんと呼吸するんだ」
小さな体を貫いたまま、告げる。だがニーナは、ぎこちない動きで首を横に振った。
「こ、こにょくらいへーキです。う、動くですよー」
彼女はどう聞いても平気ではない鼻声で言うと、拙い動きで二度ほど腰を上下させた。痛みのせいか体中が強張っている。足など哀れなほど震えていた。
(体が小さいだけあってきついな。膣内(なか)も硬い)
流石に根元までは入らなかった男根は、経験のない女特有の挿入感――包み込むというよりはひたすらに締め付ける蠢きを感じ取っていた。痛みによって力んでいるのもあるだろう。
白状すれば、既に射精欲が鎌首をもたげていた。破瓜の直後だというのに自ら動こうと足掻いているニーナの健気さが、たまらなく愛おしかったからだ。
体と感情とは繋がっている。直接ではないにしろ、確実に影響し合っている。だからこそ好ましい者と肌を合わせる時、その官能は大きく強いものになる。
「止まれ。無理をする必要はない。……さっきと同じだ。ゆっくり準備すればいいんだよ」
呟きながら、ニーナの体を抱き寄せ、乳房に手をやった。大きくはないが敏感な膨らみを、改めて愛撫する。
強くはしなかった。いまのニーナは痛みに対して敏感だ。これで性交に対して妙なトラウマを持たれるのは本意ではない。抱くからには、やはり互いにとって愉しい夜であることが望ましかった。
「はっ……ふうっ……は、ああ……」
少しずつ、ニーナの体から強張りが抜けていった。
だが、まだ足りないとブラムは判断した。
そして、ちょうどその時。
(――。なんだ?)
ブラムの中の第六感(センサー)が、なにかを感じ取った。こんな状

況でも鋭敏に周囲を警戒していたそれが訴えてくるのは、人の気配が近くにあるということだった。
（敵襲……じゃないな。とすりゃ……）
意識して気配を探る。すると別の情報も脳裏に届いてきた。足音。几帳面で軽い音だ。これは恐らく――
「……ど、どうしたです……？」
愛撫の手が止まったからか、ニーナが訊いてきた。それに苦笑しつつ、ブラムは首を横に振った。
「いや、なんでもないさ。人の気配があったが……気のせいだった」
ふたりで作った艶めいた空気を散らすのは惜しい気がして、出歯亀の存在を誤魔化した。正体については予想がついているし、害のあるものでもないだろう。
「そうですか？」
幸い、ニーナはなにも気づかなかったようで、ただ小首を傾げただけだった。
「そうさ。……さて、そんなことよりも、だ。少しは馴染んできたか？」
ニーナの腹をちょいちょいと突きながら、訊いた。膣内に深々と刺さった怒張は、いまも強い締め付けに晒されている。先ほどまで処女だったのだから当たり前だが、リラックスして受け入れることはできていない。
「……ちょっとだけ。まだ泣きそうなくらい痛いですが、少しだけなら動いてもいいです、よ……？」
「つまり、まだ全然駄目なんだな」
曖昧な報告に、ブラムは笑った。それから、焦ることはないと頭を撫でた。
「少しずつ、だ」
抽挿に耐え得るほどではないのならばと、そっと手を伸ばして陰核に触れた。これも強くはしない。軽く撫でる程度にしておく。
「う……そこ、は……」
ひくりと、ニーナの腰が動いた。むき出しの快楽神経に触れられて、痛みとはまた別の刺激を感じているのだろう。
「きゅうっ……そ、そこばっかりいじるなぁ……」
口ではそうして、責めるように言ってくる。だが敏感なところ同士で繋がっているブラムには、彼女が言葉ほどに嫌がっていないことはわかっていた。
細く綺麗な首――うなじに唇を寄せ、そっと口づける。これも、嫌がるような素振りはない。

「だ、だめ……ぞくぞくが……。ま、まだ痛いのに……気持ちいいのも、きてるです……！」
力なく漏れ出る声は、官能の疼きを確かに含んでいた。痛みはあるだろう。慣れない膣内の圧迫は苦しいだろう。だがそれとは別に、交わりの愉しみもまた、彼女にしっかりと届いていた。
「う、ふうんっ、あふ、はぁああうっ」
嬌声があがった。同時に膣内が、男根を咀嚼するかのように激しく蠢く。
（このまま射精しちまいたいが……流石にな）
邪な欲望が脳裏を過ったが、苦労して飲み下した。
そしてそのまま、十数秒が経過した。その頃にはニーナの体は、ブラムの指の動きに合わせてぴくんぴくんと不規則に震えるようになっていた。
「うくっ。そんなに、お、お豆ばっかりぃ……され、たらぁ……！　――っ、あ⁉」
ニーナが不意に、びくっと大きく震えた。
「……うっ。こ、これは……」
気のせいか、やけに焦った様子の呻き声だ。というか、怯えているようにすら見える。
「……どうした？」
よくわからず、訊ねた。だが答えはなかった。ニーナはただ身をすくませ、何かに怯えるように震えているばかりだ。
――と、その時だった。存外早い、種明かしの時がやってきたのは。
「あ、あ、あ、あ、あああああ……」
ぷしっ……ちょろろ……。
聞こえたのは、悲痛な声と、独特な水音だった。そしてそれだけ聞こえれば十分でもある。
「……あー、そーいうことか」
慣れない圧迫感で膀胱が刺激され、漏らしてしまったらしい。まあこんな寒空の下で下半身を丸出しにしていたのだから、無理もないことではあるが。
「……う、ううう……」
ニーナはくったりともたれかかってきて、恥ずかしさを堪えるように呻いた。
ブラムはしばし、どう声をかけてやったものかと悩んだ。だが――ブラムがなにか言う前に、弱々しい声が聞こえてくる。

「あ、アホ……。な、なんてことさせるですか……」
「悪かったよ。だが、ちゃんと言わないお前も悪いんだぞ？」
　言いながら頭を撫でた。別段、なにか意図があったわけではない。ただなんとなくしたことだった。不思議なことに、ニーナの頭にはそうしてやりたくなる引力があった。
「……うー。うー……」
　ニーナはなにか言いたげだったが。結局言葉にはなっていなかった。しかも頭を撫でている間にしおしおと大人しくなってきている。小型の犬のようだった。
　しばらくそうしていた。ブラムとしては、後戯のつもりだった。
　だが――
「つ、次は負けないですよ……」
　――ニーナはそんなことを言いながら、急にふんすと鼻息を吹いた。それから、ぐっと体を起こしにかかる。
「おいおい。無茶するなよ」
「でも……お前がまだ、その……」
　射精していない。彼女が言いたいのはそれだろう。察しがついて、ブラムは苦笑した。
「もう十分愉しんださ。たかが腕のかすり傷の分としちゃ、過剰なくらいにな。……とんだサービスシーンもついてきたことだしな？」
　余計なことかもなと思いつつ、付け加えた。とはいえ本心でもあった。確かにブラムはまだ精を放っていないが、『ニーナを抱いた』という実感は既に得ている。それに……つい先ほどまで処女だったニーナだ。これ以上を求めるのは酷だろう。
「うー……でも、やっぱりだめですっ」
　彼女は存外しぶとく食い下がってきた。そのまますっと腰を浮かせ、くるりと向きを変えてくる。最初にしていたような、向き合う姿勢だ。
　ニーナはそのままの体勢で腰を降ろしてきた。対面座位での仕切り直し。
「うぅ……やっぱりちょっとひりひりするです……」
　言いながらも、彼女は腰を止めなかった。ややあって、男根が再び温かな淫壁に包まれる。
「さ、最後があんなことで終わるのは、嫌です。せめてちゃんと、するですよ……」
　やがて呟いた彼女は、俯いていた。耳まで赤いので、ど

うも照れているようだった。
そして彼女は、さらにこうも言った。
「あ、あと……ちゅー、しながら、だったら。あんまり痛くないかも……です」
「……」
それに、ブラムはしばし無言でいた。だがやがて、小さな体を抱き締めながら小声で囁く。
「……自覚はないかもしれんが——お前、死ぬほど可愛いこと言ってるからな？」
どうにも止まらなくなり、じっと見上げてくるニーナに口づけを落とした。ニーナもそれに応じてきて、すぐに舌が絡む卑猥な口づけとなる。同時に、ぐりぐりと彼女の腰が蠢いた。一丁前に、腰使いでブラムを追い込むつもりらしい。
まだ破瓜の痛みは残っているだろうに、必死にこちらを昂らせようともがいている姿。健気という他なかった。男根への刺激も心地よかったが——なによりその健気さが、射精欲を煽ってくる。
（——もう射精るな、これは……！）
ニーナの口を吸いながら、内心で叫ぶ。それから彼は、ニーナの腰をぐっと強く抱き、引き上げた。
「ふうっ⁉　う、むぅぅぅっ！」
カリの返しに膣内を掻き毟られ、ニーナが仰け反った。同時にきゅっと脚が締められ、それがちょうど膣内から抜けたばかりの肉槍を挟み込む。偶然ではあるが、素股のような格好になった。
そして——計ったようなタイミングで、射精が始まった。ニーナの秘所とすべらかな内腿とに挟まれての射精。凄まじい勢いで、白濁が飛び散っていく。
だが——それだけ強烈な射精をしても、男根はまだまだ硬かった。
単にまだ一度しか射精していないためか、あるいはニーナという『女』がそれだけの魅力を秘めていたためか——それはわからなかったが。
なんにしろ、男根は萎えないまま強く脈打ち、ニーナの秘所をいつまでも擦りあげる。
「あうっ、んちゅ……ふぅんっ！」
そして——ニーナの口からは、口づけに潰された嬌声が漏れ出ていた。脈打つ男根が陰核を刺激しているからだろう。ふと気づけば、彼女は腰を前後に揺すっていた。この

期に及んで――あるいはいまだからこそ、素直に自分の快楽を貪ろうとしている。
それが、どうにも愛らしかった。ブラムは半ば無意識にぐっと身を反らせていた。すると射精直後の、しかしまだ硬さを残している男根が、ニーナの股間に強く押し付けられる。
こりこりとした感触が、男根の上部に走った。陰核の感触。しっかりと擦れ合っている。
「ふううう！　ふう、ふむぅ、ううううっ！」
ニーナがイった。粘性を増した愛液をブラムの男根に浴びせながら、ひくひくと腰を蠢かせる。それに呼応するように、ブラムは二度目の――というか、先ほどと地続きの射精をした。こちらも言わばイったばかりの敏感な男根だ。それをここまで擦られれば、無理もないことだった。
そして射精による男根の脈打ちは、三度ニーナの股間を直撃して……と、快楽はループしていく。
「……ぷはっ」
しばらくふたりの間で官能が行き来したあと。耐えがたい疼きを堪えるようにしていたニーナが、口づけを解いて大きく息を吸った。だが彼女は、どうもそこで力尽きてしまったらしい。ぽすんと前のめりに体を倒してきた。
無論、受け止めた。やや汗ばんだ額を拭いつつ、小さく熱い体を抱き締める。
「……え、えへへ」
ニーナは笑った。それがどういう意味を持つのか気になった。だが――
「か……借りは、返せたですか？」
――訊ねるより先にそう言われ、ブラムは小さく苦笑した。こんなに乱れてもしっかりと最初の目的を覚えていたのが、妙におかしかった。
「ああ。いい気分になれたよ」
「……ですか」
呟きはどこか満足げだった。それになんとなく思うところがあり、ブラムは言葉を続けることにした。
「……悪かったな。正直見くびってたよ。……お前はいい女だ」
汗の浮いた額に、一瞬だけ口づけをした。するとニーナは、触れられた部分をゆっくりと掌で撫でて、
「えへ」
また満足げに笑った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/